

北埋調報159

千歳市

ユカンボシC15遺跡(4)

— 北海道横断自動車道(千歳-夕張)埋蔵文化財発掘調査報告書 —

第二分冊

平成8・9・10年度

財団法人 北海道埋蔵文化財センター

千歳市

ユカンボシ C 15 遺跡(4)

— 北海道横断自動車道(千歳一ツ張)埋蔵文化財発掘調査報告書 —

第二分冊

平成 8 ・ 9 ・ 10 年度

財団法人 北海道埋蔵文化財センター



舟楫〔1〕



魚叩き棒〔92〕

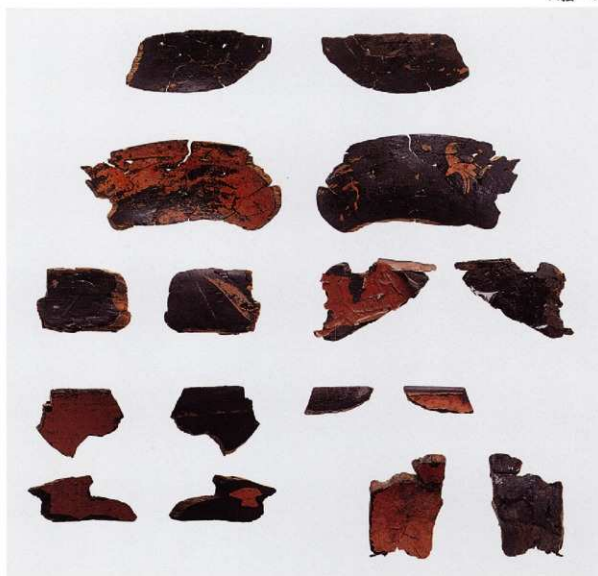
彫刻入り櫓模造品〔443〕



大型筥 [291]

刺り鉢 (ニマ) [279]





漆碗



素木碗

〔第二分冊〕 目 次

口絵

Ⅳ 低湿度部ⅠB3層の木製品

1 低湿度報告の概要	1
2 木製品の出土状況と表説明	2
3 木製品	4
4 木製品の樹種同定	212

〔第二分冊〕 図 目 次

Ⅳ 低湿度部ⅠB3層の木製品

図Ⅳ-1 低湿度部範囲図	1	図Ⅳ-45 ⅠB3層木製品(37)	168~171	64
図Ⅳ-2 ⅠB3層 木製品分布図	5	図Ⅳ-46 ⅠB3層木製品(38)	172~177	65
図Ⅳ-3 ⅠB3層 舟関係木製品分布図	6	図Ⅳ-47 ⅠB3層木製品(39)	178~181	66
図Ⅳ-4 ⅠB3層 狩猟漁撈具分布図	7	図Ⅳ-48 ⅠB3層木製品(40)	182~184	67
図Ⅳ-5 ⅠB3層 施道具類等分布図	8	図Ⅳ-49 ⅠB3層木製品(41)	185~188	68
図Ⅳ-6 ⅠB3層 容器・食器・串類分布図	9	図Ⅳ-50 ⅠB3層木製品(42)	189~196	69
図Ⅳ-7 ⅠB3層 祭祀具分布図	10	図Ⅳ-51 ⅠB3層木製品(43)	197	70
図Ⅳ-8 ⅠB3層 建築材分布図	11	図Ⅳ-52 ⅠB3層木製品(44)	198~199	71
図Ⅳ-9 ⅠB3層木製品(1) 1a	28	図Ⅳ-53 ⅠB3層木製品(45)	200~202	72
図Ⅳ-10 ⅠB3層木製品(2) 1b~3	29	図Ⅳ-54 ⅠB3層木製品(46)	203	73
図Ⅳ-11 ⅠB3層木製品(3) 4	30	図Ⅳ-55 ⅠB3層木製品(47)	204~216	74
図Ⅳ-12 ⅠB3層木製品(4) 5~10	31	図Ⅳ-56 ⅠB3層木製品(48)	217~228	75
図Ⅳ-13 ⅠB3層木製品(5) 11~12	32	図Ⅳ-57 ⅠB3層木製品(49)	229~230	76
図Ⅳ-14 ⅠB3層木製品(6) 13~14	33	図Ⅳ-58 ⅠB3層木製品(50)	231~234	77
図Ⅳ-15 ⅠB3層木製品(7) 15~17	34	図Ⅳ-59 ⅠB3層木製品(51)	235~237	78
図Ⅳ-16 ⅠB3層木製品(8) 18	35	図Ⅳ-60 ⅠB3層木製品(52)	238~240	79
図Ⅳ-17 ⅠB3層木製品(9) 19	36	図Ⅳ-61 ⅠB3層木製品(53)	241~246	80
図Ⅳ-18 ⅠB3層木製品(10) 20~23	37	図Ⅳ-62 ⅠB3層木製品(54)	247~251	81
図Ⅳ-19 ⅠB3層木製品(11) 24~29	38	図Ⅳ-63 ⅠB3層木製品(55)	252~254	82
図Ⅳ-20 ⅠB3層木製品(12) 30~33	39	図Ⅳ-64 ⅠB3層木製品(56)	255~259	83
図Ⅳ-21 ⅠB3層木製品(13) 34~35	40	図Ⅳ-65 ⅠB3層木製品(57)	260~263	84
図Ⅳ-22 ⅠB3層木製品(14) 36~38	41	図Ⅳ-66 ⅠB3層木製品(58)	264~270	85
図Ⅳ-23 ⅠB3層木製品(15) 39~42	42	図Ⅳ-67 ⅠB3層木製品(59)	271~278	86
図Ⅳ-24 ⅠB3層木製品(16) 43~47	43	図Ⅳ-68 ⅠB3層木製品(60)	279	87
図Ⅳ-25 ⅠB3層木製品(17) 48~50	44	図Ⅳ-69 ⅠB3層木製品(61)	280~281	88
図Ⅳ-26 ⅠB3層木製品(18) 51~57	45	図Ⅳ-70 ⅠB3層木製品(62)	282~288	89
図Ⅳ-27 ⅠB3層木製品(19) 58~63	46	図Ⅳ-71 ⅠB3層木製品(63)	289~290	90
図Ⅳ-28 ⅠB3層木製品(20) 64~71	47	図Ⅳ-72 ⅠB3層木製品(64)	291	91
図Ⅳ-29 ⅠB3層木製品(21) 72~79	48	図Ⅳ-73 ⅠB3層木製品(65)	292~293	92
図Ⅳ-30 ⅠB3層木製品(22) 80~84	49	図Ⅳ-74 ⅠB3層木製品(66)	294~301	93
図Ⅳ-31 ⅠB3層木製品(23) 85~86	50	図Ⅳ-75 ⅠB3層木製品(67)	302~317	94
図Ⅳ-32 ⅠB3層木製品(24) 87~91	51	図Ⅳ-76 ⅠB3層木製品(68)	318~336	95
図Ⅳ-33 ⅠB3層木製品(25) 92~95	52	図Ⅳ-77 ⅠB3層木製品(69)	337~355	96
図Ⅳ-34 ⅠB3層木製品(26) 96~108	53	図Ⅳ-78 ⅠB3層木製品(70)	356~372	97
図Ⅳ-35 ⅠB3層木製品(27) 109~129	54	図Ⅳ-79 ⅠB3層木製品(71)	373~380	98
図Ⅳ-36 ⅠB3層木製品(28) 130~142	55	図Ⅳ-80 ⅠB3層木製品(72)	381~388	99
図Ⅳ-37 ⅠB3層木製品(29) 143~146	56	図Ⅳ-81 ⅠB3層木製品(73)	389~398	100
図Ⅳ-38 ⅠB3層木製品(30) 147~148	57	図Ⅳ-82 ⅠB3層木製品(74)	399~402	101
図Ⅳ-39 ⅠB3層木製品(31) 149~150	58	図Ⅳ-83 ⅠB3層木製品(75)	403~413	102
図Ⅳ-40 ⅠB3層木製品(32) 151	59	図Ⅳ-84 ⅠB3層木製品(76)	414~424	103
図Ⅳ-41 ⅠB3層木製品(33) 152~153	60	図Ⅳ-85 ⅠB3層木製品(77)	425~435	104
図Ⅳ-42 ⅠB3層木製品(34) 154~157	61	図Ⅳ-86 ⅠB3層木製品(78)	436~443	105
図Ⅳ-43 ⅠB3層木製品(35) 158~163	62	図Ⅳ-87 ⅠB3層木製品(79)	444~451	106
図Ⅳ-44 ⅠB3層木製品(36) 164~167	63	図Ⅳ-88 ⅠB3層木製品(80)	452~461	107
		図Ⅳ-89 ⅠB3層木製品(81)	462~470	108

図Ⅳ-90	I B 3 層木製品(82)	471~472
図Ⅳ-91	I B 3 層木製品(83)	473~479
図Ⅳ-92	I B 3 層木製品(84)	480~486
図Ⅳ-93	I B 3 層木製品(85)	487~488
図Ⅳ-94	I B 3 層木製品(86)	489~492
図Ⅳ-95	I B 3 層木製品(87)	493~501
図Ⅳ-96	I B 3 層木製品(88)	502~507
図Ⅳ-97	I B 3 層木製品(89)	508~514
図Ⅳ-98	I B 3 層木製品(90)	515~521
図Ⅳ-99	I B 3 層木製品(91)	522~528
図Ⅳ-100	I B 3 層木製品(92)	529~536
図Ⅳ-101	I B 3 層木製品(93)	537~544
図Ⅳ-102	I B 3 層木製品(94)	545~550
図Ⅳ-103	I B 3 層木製品(95)	551~552
図Ⅳ-104	I B 3 層木製品(96)	553~556
図Ⅳ-105	I B 3 層木製品(97)	557~561
図Ⅳ-106	I B 3 層木製品(98)	562~565
図Ⅳ-107	I B 3 層木製品(99)	566~573
図Ⅳ-108	I B 3 層木製品(100)	574~578
図Ⅳ-109	I B 3 層木製品(101)	579~587
図Ⅳ-110	I B 3 層木製品(102)	588~594
図Ⅳ-111	I B 3 層木製品(103)	595~602
図Ⅳ-112	I B 3 層木製品(104)	603~607
図Ⅳ-113	I B 3 層木製品(105)	608~609
図Ⅳ-114	I B 3 層木製品(106)	610~611
図Ⅳ-115	I B 3 層木製品(107)	612~614
図Ⅳ-116	I B 3 層木製品(108)	615~617

109	図Ⅳ-117	I B 3 層木製品(109)	618~621	136
110	図Ⅳ-118	I B 3 層木製品(110)	622~626	137
111	図Ⅳ-119	I B 3 層木製品(111)	627~631	138
112	図Ⅳ-120	I B 3 層木製品(112)	632~639	139
113	図Ⅳ-121	I B 3 層木製品(113)	640~644	140
114	図Ⅳ-122	I B 3 層木製品(114)	645~651	141
115	図Ⅳ-123	I B 3 層木製品(115)	652~656	145
116	図Ⅳ-124	I B 3 層木製品(116)	657~662	149
117	図Ⅳ-125	I B 3 層木製品(117)	663~669	150
118	図Ⅳ-126	I B 3 層木製品(118)	670~674	151
119	図Ⅳ-127	I B 3 層木製品(119)	675~680	152
120	図Ⅳ-128	I B 3 層木製品(120)	681~685	153
121	図Ⅳ-129	I B 3 層木製品(121)	686~690	154
122	図Ⅳ-130	I B 3 層木製品(122)	691~695	155
123	図Ⅳ-131	I B 3 層木製品(123)	696~700	156
124	図Ⅳ-132	I B 3 層木製品(124)	701~708	157
125	図Ⅳ-133	I B 3 層木製品(125)	709~721	158
126	図Ⅳ-134	I B 3 層木製品(126)	722~729	159
127	図Ⅳ-135	I B 3 層木製品(127)	730~735	160
128	図Ⅳ-136	I B 3 層木製品(128)	736~740	161
129	図Ⅳ-137	I B 3 層木製品(129)	741~748	162
130	図Ⅳ-138	I B 3 層木製品(130)	749~756	163
131	図Ⅳ-139	I B 3 層木製品(131)	757~763	164
132	図Ⅳ-140	I B 3 層木製品(132)	764~771	165
133	図Ⅳ-141	I B 3 層木製品(133)	772~781	166
134	図Ⅳ-142	I B 3 層木製品(134)	782~802	167
135	図Ⅳ-143	I B 3 層木製品(135)	803~815	168

〔第二分冊〕 表 目 次

Ⅳ 低濃部 I B 3 層の木製品

表Ⅳ-1	I B 3 層掲載木製品一覽(1)	169
表Ⅳ-2	I B 3 層掲載木製品一覽(2)	170
表Ⅳ-3	I B 3 層掲載木製品一覽(3)	171
表Ⅳ-4	I B 3 層掲載木製品一覽(4)	172
表Ⅳ-5	I B 3 層掲載木製品一覽(5)	173
表Ⅳ-6	I B 3 層掲載木製品一覽(6)	174
表Ⅳ-7	I B 3 層掲載木製品一覽(7)	175
表Ⅳ-8	I B 3 層掲載木製品一覽(8)	176
表Ⅳ-9	I B 3 層掲載木製品一覽(9)	177
表Ⅳ-10	I B 3 層掲載木製品一覽(10)	178
表Ⅳ-11	I B 3 層掲載木製品一覽(11)	179
表Ⅳ-12	I B 3 層掲載木製品一覽(12)	180
表Ⅳ-13	I B 3 層掲載木製品一覽(13)	181
表Ⅳ-14	I B 3 層掲載木製品一覽(14)	182
表Ⅳ-15	I B 3 層掲載木製品一覽(15)	183
表Ⅳ-16	I B 3 層掲載木製品一覽(16)	184
表Ⅳ-17	I B 3 層掲載木製品一覽(17)	185
表Ⅳ-18	I B 3 層掲載木製品一覽(18)	186
表Ⅳ-19	I B 3 層掲載木製品一覽(19)	187
表Ⅳ-20	I B 3 層掲載木製品一覽(20)	188
表Ⅳ-21	I B 3 層掲載木製品一覽(21)	189
表Ⅳ-22	I B 3 層掲載木製品一覽(22)	190

表Ⅳ-23	I B 3 層掲載木製品一覽(23)	191
表Ⅳ-24	I B 3 層掲載木製品一覽(24)	192
表Ⅳ-25	I B 3 層掲載木製品一覽(25)	193
表Ⅳ-26	I B 3 層掲載木製品一覽(26)	194
表Ⅳ-27	I B 3 層掲載木製品一覽(27)	195
表Ⅳ-28	I B 3 層掲載木製品一覽(28)	196
表Ⅳ-29	I B 3 層掲載木製品一覽(29)	197
表Ⅳ-30	I B 3 層掲載木製品一覽(30)	198
表Ⅳ-31	I B 3 層掲載木製品一覽(31)	199
表Ⅳ-32	I B 3 層掲載木製品一覽(32)	200
表Ⅳ-33	I B 3 層掲載木製品一覽(33)	201
表Ⅳ-34	I B 3 層掲載木製品一覽(34)	202
表Ⅳ-35	I B 3 層掲載木製品一覽(35)	203
表Ⅳ-36	I B 3 層掲載木製品一覽(36)	204
表Ⅳ-37	I B 3 層掲載木製品一覽(37)	205
表Ⅳ-38	I B 3 層掲載木製品一覽(38)	206
表Ⅳ-39	I B 3 層掲載木製品一覽(39)	207
表Ⅳ-40	I B 3 層掲載木製品一覽(40)	208
表Ⅳ-41	I B 3 層掲載木製品一覽(41)	209
表Ⅳ-42	I B 3 層掲載木製品一覽(42)	210
表Ⅳ-43	ユカボンシC15道路漆等一覽	211
表Ⅳ-44	層別別樹種同定結果	221

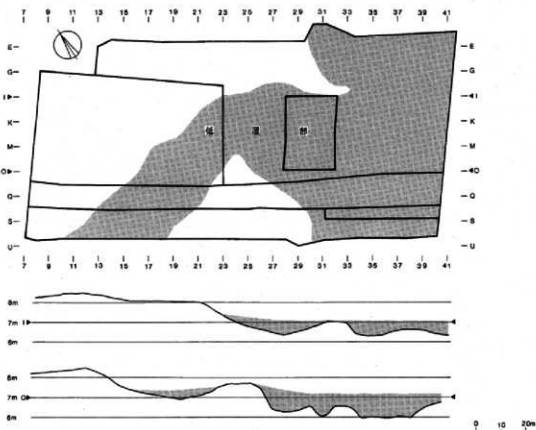
Ⅳ 低湿部ⅠＢ３層の木製品

1 低湿部報告の概要

当遺跡の調査対象の低湿部は、東地区の東・西・南側と、西地区の約半分にあった。このうち東地区は、平成9年度発行の『千歳市ユカンボシC15遺跡(1)北埋調報128』で報告した。また昨年度は、三ヵ年(1996～98年)で調査した西地区低湿部のうちⅡＢ層(縄文時代)ⅠＢ５層(縄文時代晩期～統縄文時代)ⅠＢ４層(統縄文時代～擦文文化期前葉)分を『千歳市ユカンボシC15遺跡(3)北埋調報146』で報告した。

西地区低湿部は、ユカンボシ川の最下流部で、オサツ沼に注ぐ直前の滞水域化した部分の主として左岸に、縄文時代から近代にわたって形成された。この低湿部の層序の細分はⅠ章４節「土層の区分」に掲載してある。今回は低湿部の遺物の約半分を占めるⅠＢ３層(擦文文化期中葉～中世アイヌ文化期)分を報告する。ⅠＢ３層の遺構と他の遺物は前々章と前章で扱っている。

報告内容はまず、低湿部と木製品出土の概要を示し、次に一覧表の説明を記した。そして、ⅠＢ３層の木製品の概要を示した後、製品種別の報告とした。木製品は、舟とその道具類・狩猟漁撈具・作業道具類・燃焼関係具・容器食器類(漆碗含む)・串類・かんじき・機織具・祭祀具・板・杭や柱等の建材のほか、材料である板材・割材・枝材・丸木材とそれらの加工製品、切片・炭化材・樹皮などで、合計5,129点。西地区木製品総計の約46%である。ただしこの合計は地点計測をして取り上げたものの数であり、製品の混在などを分割していくと、製品数で約5,300点、破片数だと50,000点以上となる。後半に報告分全製品の一覧表を示してある。また、樹種同定に耐えうる製品数5,131点(ⅠＢ３層の杭列含む)の同定を行い、報告してある。



図Ⅳ-1 低湿部範囲図

2 木製品の出土状況と表説明

(1) 木製品の出土状況概要

西地区の低湿部全層における木製品の出土状況は、台地縁辺となる西側が濃く、東寄りになるにつれ淡くなっていく傾向にある。西地区で地点計測をして取り上げた木製品の総計は11,102点。製品の混在などを分割していくと、製品数で約12,000点、破片数だと120,000点以上となる。

層ごとの出土傾向は、低湿部の堆積環境と連動するようである。低湿部の形成の大略を珪藻分析の結果（バリノ・サーベイ（株）に依頼、当報告V章に掲載）で見ると、II B層での環境は流水の影響のある沼沢のような水域であったが、河川の活発化による氾濫性堆積物により、低湿部内に高低差を生じた。Ta-c降下後IB4（部分的にはIB3の中位）層までは、流水の影響を多少受ける沼沢地となり、泥炭が発達し湿原が拡大した。IB3層になると池塘のような安定した止水域となり、IB2層以降では、再び流水の影響を多少受ける湿原状態となる区域もあったようである。木製品はこの低湿部の安定度や流水の影響により、各層ごとに出土状態や出土数に異同をみせる。

全域で安定したIB3層の時期には総計の約46%の木製品が、区域的に安定を続けるIB2層以降でも総計の約42%が、台地縁辺を中心に出土している。逆にIB4・IB5・II B層では、流水の影響を受けていた沼沢→湿原であったためか、合計でも約11%の出土にとどまっている。図IV-2はIB3層の木製品の出土分布を、2.5×2.5mの小グリッドごとに取りまとめたものである。

当報告分のIB3層は、10世紀前葉の降下である白頭山-苦小牧火山灰（B-Tm）を中間に挟む層であることなどから、擦文文化期中葉から中世アイヌ文化期の前葉、およそ9世紀から12・13世紀の遺物包含層ととらえられる。この下層は、IB4層：統縄文時代→擦文文化期前葉、IB5層：縄文時代晩期→統縄文時代、II B層：縄文時代、ととらえた。上層のIB2層は中世アイヌ文化期、IB1・0 B層は近世アイヌ文化期と考えている。

(2) 木製品一覧表の説明

図と写真を掲載し報告する木製品が、IB3層で816点あり、これを表IV-1～16にまとめている。また、図・写真未掲載の4,273点の製品等は表IV-17～42に一覧表にしてある。IB3層の杭類の杭19点は別途II章で扱っている。以下に、表項目の説明を記しておく。

〔製品番号〕：図と写真の掲載木製品に付した個体番号。層ごとに1からつけた。

〔遺物名称〕：用途がほぼ断定できるものにはその名称を与えた。用途未確定だが似た形状から名をつけたものもある。用途不明の製品は、加工前の材料の形態や材料名をつけ〇〇加工製品とした。

材料品は主に木取りから半割材・割材・備割材・心持材・板材などの名をつけた。割材・備割材はさらに細分してある。枝材や幹はその最大径で細枝材（2.0cm未満）・枝材（2.0～4.0cm）・丸木材（4.0cm以上）に分類した。枝分かれ材は、それが利用されそうであれば、股木材と表現した。

建築材のうち柱以外は、端部の加工などから組合せ物と判断し、建物の大枠を組むものを建材、細部の組合せ材を建築部材としたものである。ただ、使用部位の特定が難しいため、名称を細分せず、形態上の特徴と推定名を備考欄に記すにとどめた。杭類は、建物や柵など恒久的構築物に関わりそうな太さや長さのあるものを杭（股木杭）。その杭よりも細く仮構築物に関わりそうなものを細杭。利用時に刺し込むような、長さも短く単独か少数組での使用と思われるものを刺し杭とした。

切片は製品製作時の割削片、木端は製品や材料の割折片と考えている。樹皮・炭化材は樹皮・焼痕の項を参照。今回、部分品・破片にも〇〇片とはつけていない。これは埋蔵中や収蔵中に、加工と割れ・折れ・摩耗の区別がつきにくくなっていることによる。あきらかな鉋状工具での打撃的切断痕があるものは、〇〇切断品としてある。

〔発掘区〕：グリッド名は全調査区の区画。調査の都合で、②区と南側の狭長な④区に分かれていたため、頭に②と④を付けた。

〔遺物番号〕：取上げや整理作業での番号。②区と④区でそれぞれ1から始まるため、発掘区区分の②と④をつけて読む。

〔木取り〕：板材やそれを利用した製品では、柁目・板目・追柁に分けている。割材やそれを利用した製品で樹心を通して割っているものは、半割・1/4割・1/6割・1/8割・1/12割・1/16割、樹心をはずして割っているものは、偏〇割・心持と分類してある。舟や容器など割り物・捲き物には横木取り・縦木取りがある。椀では横木捲きでも、荒型の取り方や部分で年輪の見えかたに違いがある。杭や枝材など棒状の材で割りのないものは、丸木と表現している。枝分かれの股木も割りがなければ丸木である。樹種同定で樹皮組織のみの残存と確認されれば樹皮とした。切片と木端は、木取りを知ることの必要度の低さから、今回は調査していない。

〔樹皮〕：肉眼観察でごく一部にでも樹皮（外皮）が残存していれば、〇印を付す。また、樹種同定で樹皮としたもののほとんどには、外皮組織が必ず残っている。これにも〇印を付した。

〔焼痕〕：一部に焼け焦げのあるものから、焼けていない部分が少しでもあるものまでに〇印を付す。全面炭化しているものは炭化材としており、焼痕とはしていない。

〔樹種〕：基本的には顕微鏡観察で、属までの同定であるが、種まで識別できたものもある。樹種同定については、II章5節の杭列-1～6・11・12分も含めて後節で詳述する。IB3層の樹種だけでいえば、同定5,131点中トネリコ属が1,428点約28%と多数を占める。他では、ヤナギ属661点約13%・ハンノキ属371点約7%・アスナロ596点約12%が目立ち、あとの34属は各250点以下5%以下である。また、カラマツ・スギ・アスナロ・ブナ・トチノキ・タケと近辺で自生せず、持込みと思われる樹種も見られる。層位や製品と樹種の関係で特徴的なものについては、次節や製品項目の説明で触れる。

〔大きさ〕：掲載遺物は水漬き状態で、破片を接合した上での、最大長・最大幅・最大厚・重量である。そのうち特殊な計測位置であれば、計測部位を枠内に記載した。（ ）付きは、その部分や製品に欠損があることを示す。重量の項に「乾重量」とあるのは、保存処理後の計測値で、長さほかにも反映する。未掲載遺物は、破損や欠損が多いので、その遺物における最も重要な計測値を記すにとどめた。

〔縮尺〕：基本的には舟関係1/6、一般製品や板材1/3、そのやや大型のもの1/6、建材関係1/8とした。建材関係の長尺品は1/10・1/16のものがある。また、図に入りやすくするために縮率を変えたものもある。

〔備考〕：切痕や種々の加工、集中出土など、製品名などに表現できない情報や特記事項・推定名などを記す。

(三浦)

3 木製品 (図Ⅳ-2~143、表Ⅳ-1~43、図版Ⅳ-1~196)

(1) IB3層の概要と木製品分布

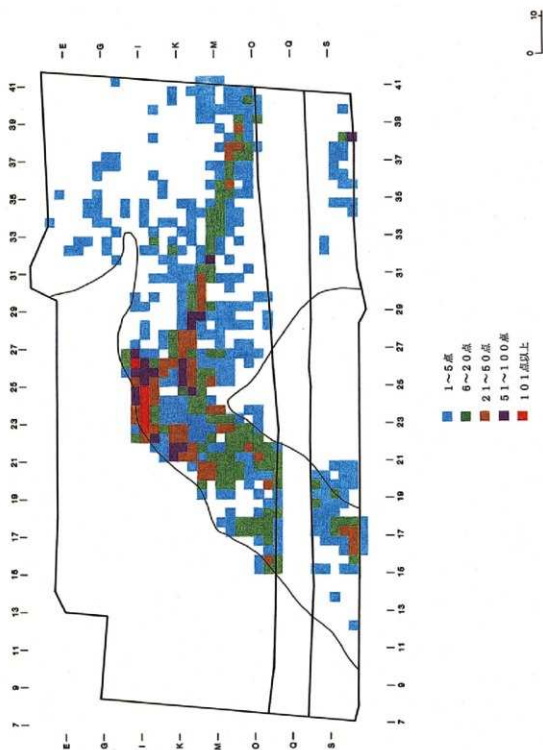
低湿度部では、IB4層の時期に泥炭の発達が顕著になって行き厚い層が形成された。その後IB3層の時期になると池塘のような安定した止水域となり、濁暗褐色~暗褐色泥炭層が低湿度全域に堆積した。この層は、10世紀前葉の降下で層厚0~2cmで断続的に分布する白頭山~苦小牧火山灰(B-Tm)で、上下に分層できることが多い。層厚20~30cmで、大きな木根や自然木も多い。

ただ木製品の出土状況においての上下層の分層は、木製品の出土数の多い台地と低湿度部の交接帯でB-Tmが見られないことや、平面的にはより断続的にしか確認できないというB-Tmの状況と、遺物の刺さり込みや重複などで難しい作業であった。実際には、IB3上層51点、IB3下層8点しか確認できなかった。調査区でのまとまりは、K24c・L24a d区で上層23点下層6点、K22a区で上層13点が判ったのみである。

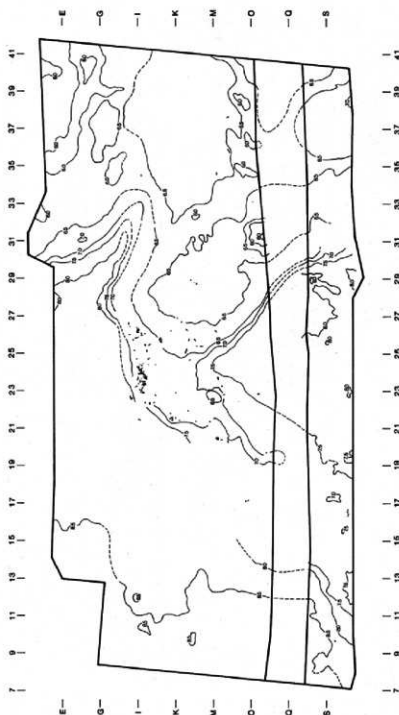
IB3層の木製品の出土状況を、図Ⅳ-2~8に示した。図Ⅳ-2は5,124全点の出土分布を、2.5×2.5mの小グリッドごとに取りまとめ、出土頻度を色分けして示したものである。分布のひとつのありかたは、T15区から南側低平台地縁に沿って台地突端のL24区に達し、そこから低湿度のほぼ中央を通りMN40区に至る、当時の水流に沿うような帯状の出土域である。もうひとつはP15区から北側台地縁に沿いL20区から密度を増してHI22~26区に集中する出土域である。ともにIB4層の分布域と重なり、遺跡形成の連続性がみられる。後者では建材が集中し舟や代表的な製品類も多く検出された。IB4層でも同じありかたであり、未報告のIB1・2層でも同じ傾向がありそうである。このHI22~26区の上下層にわたる遺物密集区については、IB1・2層の報告を待って、最終的に検討してみたい。また出土頻度は薄いが、南北西台地の東側にも分布域は広がる。特にST38区のあり方は、南東側へ広がりを予想させる。

図Ⅳ-3~8は、種別分布図である。図Ⅳ-3が舟関係(掲載No.(以下同) 1~86)、図Ⅳ-4が狩猟漁撈具(87~143)、図Ⅳ-5が作業道具類・燃焼関係具とかんじきや機械具等(144~237・393~402・472・475・477・480~489・492~496・527・531~539・562~566・571~573・803~812)、図Ⅳ-6が容器食器類・串類(238~392)、図Ⅳ-7が祭祀具(403~445)、図Ⅳ-8が杭や柱・梁等の建築材(615~774)である。未掲載遺物も掲載遺物の名称に従ってマッピングしてある。舟関係や建築材類の分布は全点図と大きな傾向に相違ない。作業道具類等と容器食器類等の分布が酷似しているのは、生活に密着した道具としての意味と、生活域が関係しているのであろう。祭祀関係は調査区中央部に集中傾向にあり、逆に遺物密集区であるHI22~26区に極端に少ない。これは遺物密集区が送り場的な性格を有し、そのために祭祀具が廃棄されないうことなのであろうか。これも次の報告以降に検討してみたい。

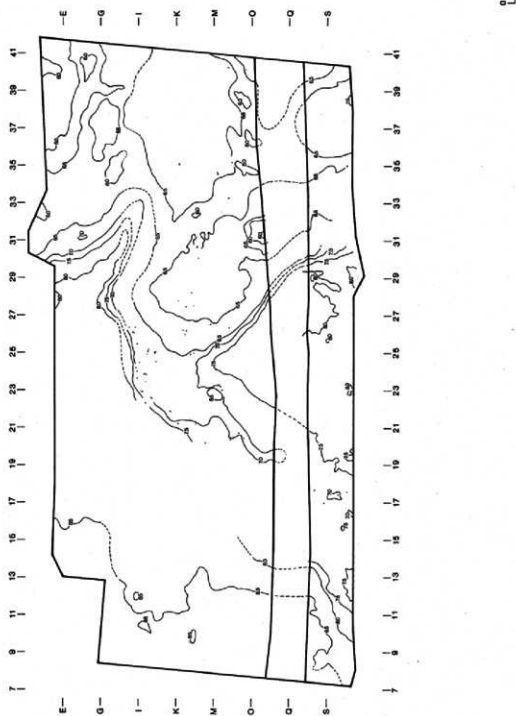
IB3層で扱う木製品の点数は、5,124点である。そのうち816点を図示し、図Ⅳ-9~143、表Ⅳ-1~16、図版Ⅳ-13~196に掲載した。未掲載品は表Ⅳ-17~42にデータのみを示した。層の状況、出土品とその分布状況や数、製品の樹種からすると、当遺跡のIB3層の時期、擦文文化期中葉~中世アイヌ文化期においては、前時期に高まった低湿度の利用度がさらに安定的なものとなり、低湿度は生活と密接なつながりを維持していたものと考えられる。IB4層と比較すると、木製品の点数は5倍以上になっている。層の時間幅や製品の腐食消失を考慮しても明らかに増大傾向である。なかでも舟とその道具類(特に車轡)・漁撈具・割り鉾と盆・漆碗・串類・柁目板・イクパスイ・各種加工品と切片・建材類が特に顕著な増え方である。これは、道具や技術の進歩、交易の拡大などによる、生活の安定と人口増という相乗効果の結果と考えられる。また、カラマツ属の車轡(35・48)やスギ・



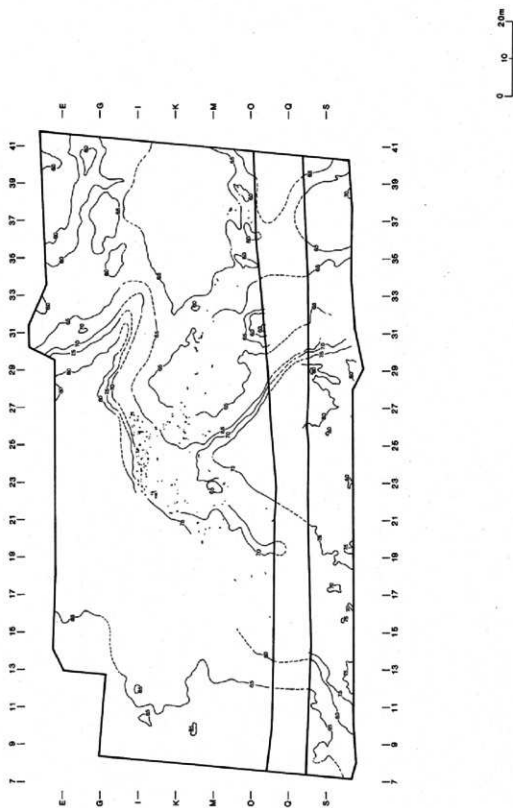
图N-2 IB3層 木製品分布図



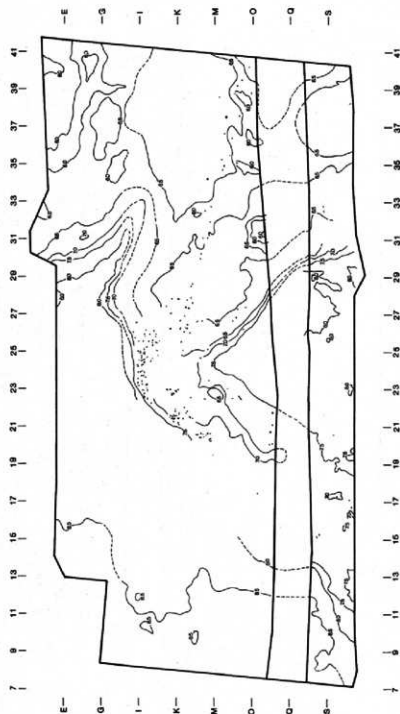
图IV-3 IB3层 舟関係木製品分布図



图N-4 IB3层 狩猎渔具分布图

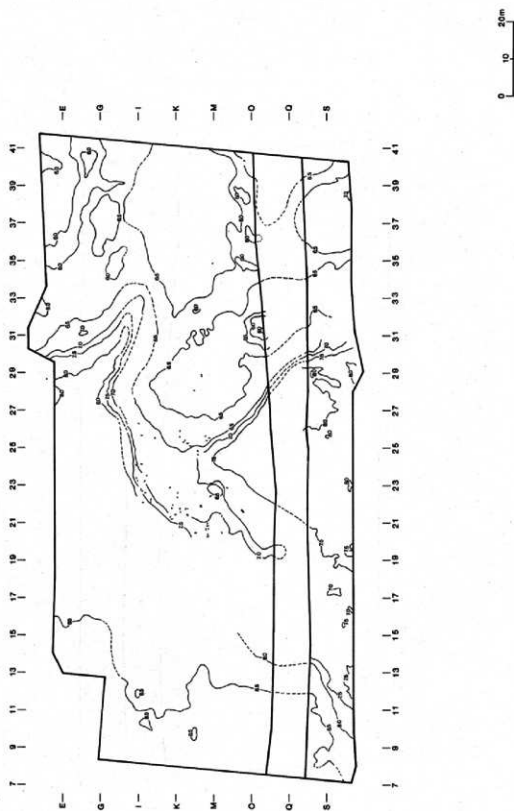


图IV-5 IB3层 诸道具類等分布图

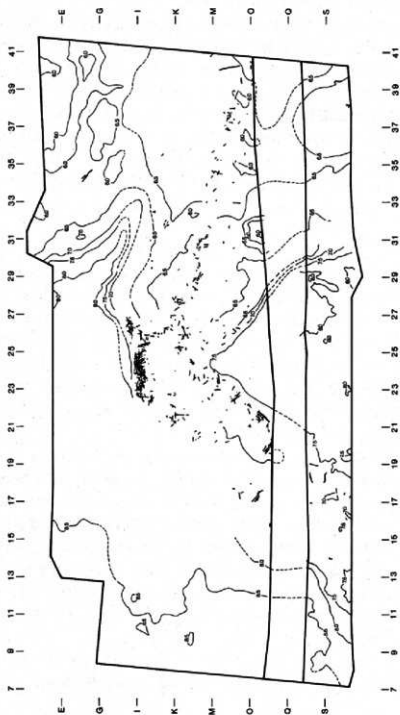


0 10 20m

图IV-6 IB3层 容器·食器·串类分布图



图IV-7 IB3层 祭祀具分布图



图IV-8 IB3层 建筑材分布图

アスナロの柁目板等、漆椀・竹材など、製品や樹種で、地場物ではなかったであろうものも相当数確認できた。当時の流通交易関係を検討する上での重要な資料となる。

利用樹種の変化で顕著なのは、トネリコ属がⅠB4層では45%もあったものが、ⅠB3層では23%に半減していることと、反面ヤナギ属が8%から13%に増加していることである。これは、低湿度や周辺環境変化に負うところが大きいものと推定される。

ⅠB3層の木製品には、舟敷・舟の舷側板・舟材・車椀と関連部品・早椀・あか汲み・浮子・キテ中柄・魚叩き棒・やす・矢・矢中柄・矢柄・弓?・鞘・縦槌・横槌・掛矢・斧柄・柄類・把手・作業台板・鉤・雪かき・楔・発火具・炉鉤・竪杵・曲物・箱物・漆椀・竹製品・割り鉢・盆皿・大型匳・匳・匳状製品・箸・串・かんじきとその軸・機械具・算木?・イクバスイ・ミニチュア製品・木幣・ビン状製品・軸状製品・棒酒匳状製品・竹材・板材類と加工製品・割材類と加工製品・丸木材枝材類と加工製品・柁目板と加工品・板類と加工製品・建築材(柱・垂木・桁・梁・補助材・横架材・杵材・股木杭・杭等)・細杭・刺し杭・切片・木端・炭化材・樹皮と加工製品などがある。図示した木製品を中心に種別・製品別に記述する。なお、個別分類の判断基準や数値は、2節(2)の一覧表の説明を参照のこと。

舟部材・舟用具

舟敷(1~5・12~15等)：丸木舟や板綴舟の舟敷の各部分である。1と2は舷部分で先端の平板部がみられる。1(口絵-1)は内法で20cmほどの深さがあり、側板部も一部残存している。船の裏側は平坦に削り出され側面部との変換点は明瞭な稜をもつ。埋蔵中や保存処理により底部の破損部付近が歪んでいるが、本来的には平滑に舟底をなすものである。2の先端平板部には木幣を装着するための孔があげられている。4・5は艫で、4は内法で30cmほどの深さがあり、1と同じく裏側が平坦で側面部との変換点は明瞭な稜になる。12-3は舷部か艫部、12-1・2~15は木取りから舟底とみられる。1~5・12~15はすべて巨木から横木取りされ、底や側が厚さ3cm前後に削り込まれている。舟廃用後の板材利用で取り残された部分であろうか。

次項の舟材とともに未掲載品も含めて樹種でみると、21点中シナノキ属が7点、ハリギリ6点、ヤナギ属・ハコヤナギ属と続く。図示したものでは1・4・12・13と舟材10・舷側板26の樹種はシナノキ属である。シナノキ属(推定でシナノキかオオバコダイジュ)の舟は、出土品では千歳市美々8遺跡のⅠB3層(縄文文化期)の有孔板材(舷側板、『美沢川流域の遺跡群XⅦ』北埋調報102)と、0B層(1667~1739年)の舷側板(『美沢川流域の遺跡群XⅧ』北埋調報114)がある。当遺跡でも昨年度報告のⅠB4層と来年度以降の報告分でシナノキ属の舟敷材がある。また、聞き取りによって八雲(犬飼ほか1953)と長万部(知里1953)でシナノキの舟が知られている。特に長万部では、メカジキの吻骨に突き刺されても割れないように、舟底は必ずシナノキで作ったという。ハリギリは加工しやすく、各地で舟の素材として使われている。

舟材(6~11等)：いずれも舟敷に取り付けた舷(艫)材か舟本体の舷(艫)であろう。10は先端平板部が削り出されており、削り込みとの境目には段差がある。腐食や破損が著しく形状の把握しにくいものが多い。

舷側板(16~26)：板綴舟の側板で、ほとんどに四角くあけられた綴じ孔が確認できる。綴じ孔の横方向の間隔は、ほぼ15・20・30・40cmで、5cmか10cm相当の単位が存在しているようである。19の片側辺には20cm間隔で7個の綴じ孔が並んでいる。個体では大きさにより厚さに違いもあるが、概ね2cm前後の均一な厚みを持つ大型の板である。18・19が本来の幅を保っているものであろう。18・22は舷

(鱧) 付近の部位の板である。

舷側板を再利用した加工製品 (291・292・562~566) や有孔板 (601~603) とともに未掲載品も含めて樹種でみると、23点中ハリギリ9点、シナノキ属が3点、ヤナギ属・ハコヤナギ属と続き、舟材と同傾向を示す。これは舟用材の選択に特定の樹種が当てられていることを示している。

舟部材 (27~31) : 27は台形、30・31は横長台形の板で、31の上下辺には向かい合う2対の切り込みが入っている。45~70cmの長さがあり、逆台形にすると、舟内部の仕切り板兼構造材とみることができる。28は舟内部の構造材 (あばら材)、29も31と似た切り込みがあり構造材と考えられる。

車櫓 (32~54等) : 32~47は車櫓の柄と軸孔部分、32では水掻部への移行部もみられる。48~54は水掻部である。柄は略円形に削られており、軸孔までの長さは55~70cmである。端部に装着する握り部は出土していない。長さ調整のため軸孔が2孔確認できるもの (32・36・39・40・43・47) も多く、37のように3孔のものもある。孔径はおおよそ3~4cmで、使用による摩耗で拡大したもので5cmある。製作当初は径3cmほどと推定できる。軸孔と水掻部の距離は34~36でみることく柄の長さよりもやや長いようで、柄と同じく略円形に削られている。水掻部は断面凸レンズ状で、48では片面に稜がある。長さは破損品の48からみて130cm以上のものもある。先端形は、体部と同じ幅で丸みを持つもの (48~50) と、細身になるもの (51・52・54) とがある。

未掲載品も含めて樹種でみると、24点中ハンノキ属11点46%、モクレン属8点33%と両者で大半を占める。ケヤマハンノキ・ヤチハンノキ・ミヤマハンノキ・ホオノキ・キタコブシが推定でき、比較的一般的で、材の長さの確保できる樹種として、車櫓用材に選定されているのであろう。車櫓の樹種で注目されるのは、35・48のカラマツ属である。遺跡周辺のものではなく、日本海側からの交易者の舟の櫓として明らかに持ち込まれたものである。本州・北海道の他例を探索することで、交易等の地域の連携が顕在化してくるであろう。

車櫓受台部 (55~65) : 板綴舟の舟縁に取り付けて車櫓の動きの支点を形成する舟の部品で「タカマ」と呼ばれる。支点となる軸が本体から出た枝である軸枝利用式 (60~63) と軸を差し込む孔が開けられた軸差込式 (55~57・64・65) がある。両端には舟縁に固定するための挟りが入っているものが多い。軸枝利用式は62のように枝軸が直角のものと、60・61・63のように枝が成育した方向に角度がついたものがある。舟に装着する際、前者には制約がなく、後者には左右の別があったものと思われる。軸差込式の軸孔は58・59・64のように角形が確認できる。65は建築材等の可能性もある。割材からの加工が一般的である。樹種では軸枝利用式のモミ属 (トドマツと推定) が特徴的である。

車櫓受台部軸 (66~79等) : 軸差込式の車櫓受台部に挿入し、車櫓の支点となる軸である。74以外は枝材から作られたものである。頭部が明瞭なもの (66~68・70・75)、軸部に向かって徐々に径を減じるもの (69・72~74・76・79)、頭部軸部の径がほぼ同じもの (71・77)、両端とも軸部 (78) がある。軸部の加工が明瞭なもののうち70は丸軸、72・73・76は角軸である。72~76・79には使い減りと思われる摩耗痕がみられる。

早櫓 (80~84等) : 80・83・84は水掻部の幅広いバドル形、81・82は幅狭で長い水掻部のオール形である。81は車櫓水掻部の可能性もある。80・83の柄から水掻部へ移行は、肩がなく厚みを減じ幅を増す形態である。80・81・82の水掻部の先端は尖がり気味である。6点中3点がモクレン属で、車櫓と同様に樹種選定されていたものであろう。

あか汲み (85・86) : 舟の中に入った水を掬い出す道具である。85は透しの入った取っ手部分で、本体部分は欠損している。86は水掬い部が浅く丸みを持っている。あか汲みではなく、灰掻きや他の掬い具であるかもしれない。

漁撈具

浮子 (87・88) : 87は平面紡錘形、88は棒状に削り整形した網の浮子であろう。端部付近に固定の摩擦痕がみられる。538・539の卵形の板材加工製品も浮子の可能性がある。

キテ中柄 (89~91) : 3本とも一本式の回転式鹿頭鉈の中柄。棒との接合部は、89・90が裏面を平坦に削ったタイプ、91は片面を緩く斜めに削って形成している。結合のための挟りが89は2段、90・91は1段削り込まれている。91は正面から反側面にかけて半周している。いずれも鉈先装着部の削り込みが不明瞭である。ノリウツギの半割材を使用しているという共通点は、既報告のIB4層の1点も同じで、樹種選定への強いこだわりと言える。ノリウツギはアイヌ語で「ラスパ・ニ」、槍や鉈の中柄を作る木の意である (知里1953)。

魚叩き棒 (92~95) : 捕獲後の魚の頭を叩く棒。93~95は握部と叩き部の境が不明瞭。92 (口絵-1) は太さ4.5cmの叩き部と2.5cmの握部が明瞭で、握部尻は太さを残している。この握部尻と叩き部元には紋様彫刻が施されている。92・94はヤナギ属枝材を加工した製品。ヤナギは木幣を作る木で、魚叩き棒をヤナギで作るのは、魚の霊を神のもとに送るというアイヌ民族の精神文化の現れであろう。

やす・矢 (96~105) : 漁獲用の「やす」か、狩猟用の矢に分類されるもの。96~103は同じ加工、同じ形態の製品である。鉄部は円錐形かそれ以上削り込み鋭さを持ち、その直下は円筒形になる。円筒形の下部には斜め下から逆削りの加工が一周3箇所入り、部分的に断面三角形をなす。さらに3~6cmの明瞭な筈被ぎ部、長く先細りの基部という構造である。105も相似しているが、鉄部や全体のフォルムが簡略化されたもののように見受けられる。104は長三角形鉄部を削り出した平茎の矢である。鉄部が断面三角形なのでここに分類した。10点すべて枝の割材から作られており、内9点がノリウツギ製である。鉄部と中柄部が一体となっているこの手の製品も、中柄を作る木「ラスパ・ニ」=ノリウツギから作ったのだろう。

狩猟具

矢 (106~120) : いずれも直接矢柄に装着する中柄一体形の矢である。先平形が8点 (108・109・111~115・117)、先山形が7点 (106・107・110・116・118~120) ある。106は挟りで、116は基部の加工で鉄部を作出している。108・109・116~120の6点は先端の幅が狭く、一旦膨らんでから基部に移行するが、他の8点は先幅が広く徐々に基部へ幅を減じる。基部が明瞭なのは106・116・118・119である。枝の割材加工が10点、樹心を残すものが5点ある。全15点中10点がノリウツギ製であるのは、「やす・矢」と同様の理由だろう。

矢中柄 (121~139) : 先端に鉄部を、尾部を矢柄に装着するもので、19点すべて両端部が細く体部の太い中柄特有の形状をしている。前項の先山形の矢との判別が難しいが、先がより細く薄いものを鉄装着部と判断し矢中柄とした。131~133は基部が明瞭なやや短いタイプである。長いものの21.7cm (130)、短いもので10cm未満で、15cm前後が標準である。19点中、枝の割材加工が18点とほとんどで、ノリウツギ製が16点を占める。中柄を作る木「ラスパ・ニ」の所以である。

矢柄 (140) : やはりノリウツギ製である。尻部は弓弦に掛かるよう切り込み加工されている。先端部は山形で、そのまま矢になるものかもしれない。

弓 (141~143) : 141・143は丸木加工品、は割材加工品である。141は端部の挟りを弰加工と見て、142・143は反りの形状と先細化加工から、弓と判断した。142は小型の儀式用?の弓、143は120cmを超える弓である。

諸作業道具

鞘 (144・145) : 小刀の鞘。144はハリギリの板目板 (追証気味) の一面を刃部形に削り込み、2枚

を合わせてサクラ?の樹皮帯で留めたもの。樹皮帯は横方向の切り込みに先を差し込むものと、スリットを切り先端を挟み込むものの2条がある。145も合わせ作り、ハリギリの柃目板を加工した鞘口の破片である。

縦槌 (146・147) : 2本とも柄穴式の縦型の木槌で、頭部と柄が同じ木(樹種)から作られている。146の頭部は柄穴面を平らに削った丸木材を使用。柄穴がほぼ中央にあけられ、柄穴内には柄木の一部が残存している。147は完形の縦槌。頭部は丸木材の4面を削った心持材で、打面もほぼ平坦である。柄穴は片側に寄って、手元側が広くあけられている。柄は1/4割材を加工した平角材で、端部が撥状に加工されている。

横槌 (148・149) : 丸木材から一本で作られた横型の槌である。148は柄の長さ10cm、頭部長11cmの小型の横槌で柄が細く削り出されている。頭部は樹皮部を削っただけの粗い加工で、頭頂面には材切断痕がみられる。149は丸木材を粗く加工しただけで、両端とも切り出し痕が残ったままである。柄部は7面削りである。両者とも使用痕らしいつぶれがみられる。

掛矢 (151~153) : 大きさや形状から、杭などを打ち込む大型横槌、掛矢と判断した。151は前出の横槌149を大型化したような製品。152も丸木材で、バット状の粗い加工品である。153は大型の割材加工製品だが、柄の作り出しや整形された頭面から掛矢であろうと考えた。

斧柄 (150) : 枝別れ材の幹を割りとし、削りで加工して斧台部とし、枝を柄部とした斧の柄。樹心部にあたる斧台面は平坦に整形されている。斧台と柄の角度は約45°である。大きさや斧台部形状から手斧の柄と思われるが、装着される斧が袋状鉄斧か板状鉄斧かは不明。

柄 (154~194等) : 他の部品を装着して一体で道具となる製品の、柄の部分を総括する。

154~161は端部付近に幅1.5~2cm未満の袢りが入り、端部が袢り側に斜めに落されている長い柄である。うち154~157はカエデ属の1/4割材を加工した平柄で、154・156の袢りはやや傾斜して入っている。この4点は近隣土士の出土で、組み合わせて使うセットものかもしれない。158~160も袢り部は同じ形状を呈するが、丸木(枝材)を加工した丸柄になる。161は1/4割材を加工した角柄で、袢り部もやや太めである。利用方法は不明で、それによって頭部と装着部の認識が入れ替わる。

162は中間部に袢りが入り、細くなる方と反対の破損端部は段付きになる。魚突鉤鋸台部の可能性があるが、金属部分の出土を確認していないので柄の一種として掲載する。

163~167は端部有孔柄で、丸木(枝材)を加工したもの。165は平角柄で丸孔、163・164・166・167は丸柄で角孔。後者の有孔部は両面からの削りで平坦に加工されており、建築部材の可能性もある。また、168のように頭部がつき装着部が有孔なのかも知れない。

168~174は頭部削り出しの柄。168~171は平角柄で168は装着部が有孔、172~174は略角柄である。頭部は168・171・173・174のように主に片側に張り出すものと、169・170・172のように全周均一に張り出すものがある。171と174は割材加工、他の5本は丸木(枝材)加工である。

177~181・191は丸木(枝材)の丸柄である。178は長頭部があり、装着部には削り加工が入る。

182~184・186・187は割材加工の丸柄である。182は片側突起に帯状の彫りが入る装飾的な頭部がある。この頭部から16cm部分に加工の変節点があり、そこから突起までが装着部になる可能性もあろう。183の片端部は両側面からの袢り込みで幅狭の突起となり、太い方の端部も削りで角形に加工されている。どちらが頭部か装着部かわからない。

175・176は丸木(枝材)加工の平角柄、188・190・192・194は割材加工の平角柄、185・189・193は割材加工の角柄である。189・190・192は長さ30cm未満の短尺柄である。

丸柄とそれ以外はほぼ同数、丸木と割材加工の比も同率で、丸柄でも割材加工のものが約半数ある。

用途の違いに応じた加工なのであろうか。樹種でみると46点16属と分散するが、カエデ属6点が全体の出現率からみると特徴的か。ただ、それも154～157の4点の形状と出土地点の共通点によるものである。

把手 (195) : 細枝に木の節を加工した握り部?のある製品。持ち手・把手になるものと思われる。

作業台板 (196～201) : 196・201は厚板材を使い、200は丸木材を切断した、刃物作業用の厚味のあつた円形台。197～199は柾目系の板を加工した刃物作業台板。199は角を落した台形状で、損傷が激しい。198・199は長方形で、ともに両面が使用されている「まな板」と思われる。198はつまみ様の突起を持つ。

鉤 (202) : 150の斧柄と同じく、枝別れ材の幹を割りとはりで加工して使用部とし、枝を柄部とした製品。全体に細いが鉤部分は尖っており、土掘り具の可能性もある。鉤部と柄の角度は約45°である。華奢な様態なので、炉鉤とは見なかった。

雪かき (203) : 樹心を選り抜いて半割した材を加工し、板状部と丸柄を形成した製品。板状部は断面の平坦さを維持しつつ削りて調整している。屋根の茅そうえなどの用途も検討したが、伝世している資料との相似と、394の「かんじき」の出土から、「雪かき」と考えた。

楔 (204～226等) : 未掲載品を含め39点が出土している。木割りに使用するものだが、小型品の中には道具等の接続部の弛み止めもあるだろう。両面平らなものもあるが、片面は必ず平滑に仕上げられている。割材や板材の切れ端や廃品等を利用したものが多いであろう。224～226は丸木(枝材)から作られており樹心がある。

基本的に厚さが1.8cm以下の薄めのもの、厚さ1.8cm以上かつ幅と比較して厚みのあるものに分けられる。さらに薄型は幅広先平型 (205・207)、幅広先丸型 (216)、幅広先丸型 (206・208～215・219・220) に分類でき、厚型は先平型 (204・224・226) と、先丸型 (217・218・221～223・225) に分類できる。

発火具 (227・228) : 227は火鑽り棒、228は火鑽り板である。227はニレ属の枝の1/4割材を使い、火鑽り部の径は1.1cmで焦げている。15cmほどの長さしかないことから、使用済みの廃用品と思われる。228は箱板材のスギ材を再利用し両端を山形にカットしたもので、端部付近に1箇所の火鑽り白が鑽られている。火鑽り白には位置決めのための外周円が二重に引かれている。白部は径1.3cmで焦げており、火口に火が移りやすいようにV字刻みも施されている。また、板の中央部には彫刻のような鱗文がある。

炉鉤・吊り鉤 (229～235) : 枝別れの股木材を利用し、231以外は幹を体部、枝を鉤部にした製品。全般に荒っぽい加工で、鉤の先端は切痕のままのものが多く、屈曲部には比較的精細な削り加工が入る。231は枝を体部、幹を短い鉤部に加工している。吊り下げ接続部の形態は230が股木部を利用し、231・233が挟りで作出している。頑強さや鉤部の加工等から土掘り具ではなく、炉鉤か物を掛け吊す鉤に分類した。吊り鉤では、鉤に物を吊す場合と、鉤を固定部に引っ掛ける使用法がある。

挟み木 (236・237) : 丸木に縦割りをいれて物を挟めるようにした枝材。焦げ跡がないので燈火の挟み木とは限定しなかった。食物等を挟んで、炉の廻りに差して使うこともできる。

堅杵 (238～240) : 丸木材から握り部と掻き部を削り出した両頭の堅杵。238・239は完形品、240は半分を欠損する。長い両頭部の端部にあたる掻き面は、平坦かやや丸みを持ち、つぶれてはいないが摩耗が認められる。I B 4層で報告したものとは、掻き部の形態が異なっている。なお、掻き部の形状は、使用方法および対象物により、「掻く」と「擦り潰す」では違ってくるという。食料・農業・交易など関わって来る問題および遺物である。

容器類

桶? (241・242) : 241は板目の彎曲板で、内側端部に直線状の凹みがある。桶の側板の可能性もある。242はカーブを持つ辺のある柁目板材の加工品。桶の底板を再利用したものか。

曲物 (243~252等) : 243はスギの板目板を円形円錐台型に加工した小型製品。244~246はアスナロの柁目系の板を薄く円形に加工したもの。247のような曲物の底板であろう。

247は側板(曲輪)と底板が結合したまま出土した資料で、側板の幅4cm、底板の径25.3cmを計る。底板の径のほうが側板の径より大きくて底板が出っ張る「カキソコ」といわれる形態で、側板および側板と底板の結合は樹皮による綴じ方式である。側板は内二段綴じで、そのまま連続して底板と固定されている。底板に残る樹皮と痕跡から、直交する4箇所であみられていることがわかる。側板の内側には、曲げやすくするための毛引き線が、斜め(一部で斜め格子状)に入っている。材質はアスナロである。

248はアスナロ材の幅6.5cmの側板片で、毛引き線が縦方向(一部で斜め重複)に5~8mmの間隔で入っている。249はアスナロ材の幅4.3cmの側板片で、毛引き線が縦方向に4~7mmの間隔で入っている。250は幅6.1cm、251は幅6.3cmのスギ材製の側板片で、毛引き線が斜め方向に広い間隔で入っている。252はアスナロ材の幅10cm前後の側板片で、毛引き線が縦方向(一部で斜め重複)に3.5~10mmの間隔で入っている。また、綴じていた樹皮帯も同時に出土しており、折れ曲がりかたから、四段綴じと推定できる。後出の柁目板(574~599等)の大半も曲物側板であろうが、とりあえずは毛引き線の有無で分けて掲載した。曲物の樹種は、アスナロとスギのみで、持込み品・交易品と考えられる。

箱物 (253~259) : 曲物の側板よりは厚い柁目板で、幅の狭い細長い板を箱材とした。未掲載の細板の中にも同類品は存在する。253は長辺に4本、短辺に3本の釘跡のある小型の板。小箱の底板であろう。251にも釘跡らしき小孔がある。255の端部には一段削り込みがあり、合わせの加工と思われる。ほとんどがアスナロ材で持込み品・交易品と考えられるが、モミ属(トドマツと推定)材もあり、箱物は自前の製作もしていた可能性がある。

漆椀 (260~275) (口絵-3・4) : 16点出土しており、出土状態は口縁部小片6点・胴部小片3点・底部片1点・口縁部~胴部2点・1/3~復元可能な破損品4点である。いずれも木胎が残っており、サンプリングした上での木胎と下地・漆膜の観察・分析を、くらしき作陽大学食文化学部の北野信彦氏に依頼中である。木地の樹種は、漆椀の汎用材であるトチノキ6点・ブナ属3点、比較的使用例の多いカツラ4点、希少例であるエゴノキ属・ハリギリ・トネリコ属各1点となっている。点外未掲載9482は、赤色顔料片が劣化漆膜である。269はB-Tm下のIB3下層からの出土で、縄文文化期併行の漆椀である。なお、昨年度報告(北埋調報146)に掲載した「表Ⅳ-6 ユカンボシC15遺跡漆椀等一覧」に訂正・追加があったので、当報告に表Ⅳ-43として修正版を掲載してある。

260は細片で出土したが、接合により口縁部~胴部~底部が明らかになった。胴部から口縁部にかけては垂直に立上り、器厚は0.3~0.4cmと薄い。尻部の張りはなく、底部厚0.7cm、高台外高は0.5cm、推定復元の数値は、口縁径16.5cm、高台径7.7cm、器高8.7cmである。木地の樹種としては数少ないエゴノキ属で、木地の内外面には轆轤挽き痕や面調整痕が観察できる。黒漆を内外面に塗り、内面は朱色漆塗り、外面には朱色漆で文様(詳細不明)を描き仕上げている。

261は約1/2の破片であるが、口唇部と高台を欠き、つぶれによる歪みもある。胴部から口縁部にかけては垂直気味に立上り、器厚は口唇部0.2cm、底部0.8cmである。尻部はやや張り、高台は切り取られ、平底になっている。高台なしの推定復元の数値は、口縁径13.5cm、底径7.8cm、器高7.7cmである。木地の樹種はハリギリで、木地の内外面には轆轤挽き痕や面調整痕が観察できる。黒漆を内外面に塗

り、内外面全面に朱色漆で菊花文様を描き仕上げている。

262は口縁を全周欠き、つぶれによる歪みもある。胴部から口縁部にかけては緩く立上り、尻部も張りが無い。器厚は厚く、胴部0.5cm、底部0.9cmである。高台外高0.6cm、高台径7.6cmで、高台接地面は擦れて漆塗りがなくなっている。木地の樹種はトチノキで、木地の内外面には轆轤挽き痕や面調整痕が観察できる。黒漆を内外面に塗り、内面のみ茶色がかった赤色の漆塗りを施している。高台内の高台際に「・ト」のような彫りが、漆塗り後になされている。元々の所有者の彫印か、新所有者のイトクバであろう。

263は底部の1/4ほどの破片。器厚は胴部0.35cm、底部0.7cmで、尻部は張りがなく緩く立ち上がる。高台推定径8.1cmで、高台接地面は擦れて漆塗りがなくなっている。木地の樹種は漆碗としては汎用材ではないトネリコ属で、内外面とも黒漆塗りである。

264は口縁から胴部の約半分を欠くが、口唇部が部分的に残っている。胴部から口縁部にかけては垂直気味に立上り、尻部はやや張り、器厚は口唇部0.2cmから徐々に厚く尻部で0.6cmを計る。高台径8.2cm、高台外高は1.9cmと高いが、高台内は削りが浅く、底部厚は1cmもある。高台接地面は擦れて漆塗りがなくなっている。推定復元の数値は、口縁径16.2cm、器高7.6cmである。木地の樹種はブナ属で、木地の内外面には轆轤挽き痕や面調整痕が観察できる。黒漆を内外面に塗り、内面のみ橙色がかった赤色の漆塗りを施しているが、内面の赤色漆はほとんど剥落している。

265・266は同一個体とみられる口縁部片。口唇部は極端に薄く0.2cm、胴部は0.5cmの厚さがある。推定口径13.0cm。木地の樹種はトチノキで、木地の内外面には轆轤挽き痕や面調整痕が観察できる。黒漆を内外面に塗り、内面は橙色がかった赤色の漆塗りを施し、外面には朱色漆で文様（詳細不明）を描き仕上げている。

267は胴部片で、器厚は0.55cm、木地の樹種はトチノキである。黒漆を内外面に塗り、内面は橙色がかった赤色の漆を上塗りしている。外面は漆膜がほとんど剥落しており、下地しか確認できない。

268も胴部片で、器厚は0.6cm、木地の樹種はブナ属である。黒漆を内外面に塗り、内面は褐色がかった赤色の漆（黒漆に朱やベンガラを混ぜた漆：‘うるみ’か？）塗り、外面には朱色漆で文様（詳細不明）を描いている。

269は1/3ほどの口縁部片。口唇部は極端に薄く0.2cm以下に挽かれ、胴部は0.6cmの厚さがある。立上りは緩く、推定口径16.5cm。木地の樹種はトチノキで、木地の内外面には轆轤挽き痕や面調整痕が観察できる。黒漆を内外面に塗り、内外面とも朱色漆で文様（詳細不明）を描き仕上げている。

270も1/3ほどの口縁部片。推定口径20cm。胴部から口縁部にかけては垂直気味に立上り、器厚は口唇部0.3cmから徐々に厚く尻部付近で0.65cmを計る。木地の樹種はトチノキで、木地の内外面には轆轤挽き痕や面調整痕が観察できる。黒漆を内外面に塗り、内面は朱色漆塗り、外面には朱色漆で鳥と木の文様を描き仕上げている。文様は松に鶴とみられる。

271は口縁部小片。口唇部0.2cmの薄い造りで、推定口径は10cmである。木地の樹種はカツラ。黒漆を内外面に塗り、外面には朱色漆で草花文が描かれている。

272は口縁部や胴部の接合しない小片6片。口唇部厚0.25cm、胴部厚0.35cm、推定口径は13cmである。木地の樹種はカツラ。黒漆を内外面に塗り、内面のみ茶色がかった赤色の漆塗りを施している。外面には朱色漆で、口唇部付近に線文（風景文の一部か）、胴部片に千鳥が描かれている。

273も口縁部小片。厚さは0.35～0.4cmで、推定口径は12cmである。木地の樹種はブナ属。黒漆を内外面に塗り、内面にのみ橙色がかった赤色の漆を上塗りしている。

274は口縁部微小片。厚さは0.4cmで、推定口径は12cmである。木地の樹種はカツラ。黒漆を内外面に

塗り、内面にのみ橙色がかった赤色の漆を上塗りしている。

275は尻部片。やや張りのある尻部は厚さ0.6cmある。木地の樹種はカツラ。黒漆を内外面に塗り、内面には橙色がかった赤色の漆を塗り、外面には朱色漆で文様（詳細不明）を描いている。

素木椀（276・277）（口絵-4）：漆椀と分類していた中に観察の結果、漆塗りがなされていないものが、2点あった。2点ともブナ材の素木の挽き物椀である。276は底部片。高台部が残っており、径7.3cm、高台外高0.55cmを計る。尻部の張りはなく緩やかに立ち上がる。器厚0.35cm、底厚0.75cmである。277も底部片。挽き削りのない平高台が残っており、径6.3cm、高台外高0.4cmを計る。器厚が胴部で0.45cm、尻部で0.55cm、底部で0.7cmと厚く、尻部はやや張りがある。

漆塗り竹製品（278）：片端は節と一部に突起を残して切り、もう一方は口を開けるよう節と節の中間で切り落した竹材加工品。節底と口縁部には削り加工が施されている。節側外面には針葉状の彫刻や方形削りが入り、突起部にも挟りや透し？が入るが、突起の先は破損している。内外全面に黒漆が塗られている。竹に漆塗り、本州方面との交易品である。用途は不明。

削り物（279～290）：半割材を横木にして舟のように、あるいは丸木を縦木にして、材をマキリ等で削り込んで作った「うつわ」ものをここで扱う。279（口絵-2）は半割材を横木取りした浅鉢で、片側に舌状の突起が削り出され、全体はスプーン状の削り込みと先端部を持っている典型的な削り鉢「ニマ」である。280・281・284も半割材を横木取りした浅鉢で、280には注口状のすぼまりが見られ、やや深めである。282・285も横木取りの削り鉢だが深鉢になる。282は口唇部片、285は心持材を側面から削り込んだように見える。

283は丸木材を縦木取りした円形の皿、288は節を削り込んだ皿、289・290は板状の大型皿である。290は半円形で、削りよりも削り加工が全面に目立つ。

286・287は半割材を横木取りした盆（イタ）の破片。286は縁から角にかけての破片で、裏面に鋭痕が見られる。287は樹表側から削り込んだ盆の縁部で、縁に沿って径1.5cmほどの孔が並んで穿たれている。盆以外の製品であろうか。

食用具

大型筥（291・292）：筥の大型品で、酒の醸造や、大量の汁物を攪拌するときに使用する。両者とも角孔が偏った場所にある大型の板加工品で、舟の舷側板を再利用したものであろう。291（口絵-2）は両端が撥形に開く形状で、筥先側は欠損するが、持ち手側は山形で小突起がある。292は撥形で筥先は直線と推定できる。舷側板の船部分の再利用らしく、持ち手側は滑らかなカーブを描く。

筥・筥状製品（293～295・296～301）：293は1/12ほどにみかん割りの材から加工した筥。粗い作りで、柄は斜め削ぎ、筥部は面を大きめに削って薄めに仕上げようとしている未製品かもしれない。294はアスナロ材の柾目板加工品で、端部が平たい筥。295は1/4割材から削り出した柄と舌状の先を持つ筥。296はアスナロ材、297はスギ材の柾目板加工品、298～301はスギ材の板目板加工品である。いずれも端部を両刃状か片刃状に削っている（299は両端とも）が、尖っていることから筥状製品とした。294・296～301は持ち込まれたアスナロやスギ材の製品部材の再加工の可能性がある。

箸（302～317等）：17点出土している。枝材を1/4～1/6割した材と、持ち込みのアスナロ等の板材を小割して細材にしたものとがほぼ半々である。この細材を細化調整加工して、断面を方形～楕円形に仕上げている。302～304は太さ1cmほどで調理用共用の箸、305～317は太さ1cm以下で個人用の箸と思われる。全体の細さと均一さ、先端の細さ具合から微妙ながら細申・平細申や楕円申と区別している。モミ属・トウヒ属・イチイなどの針葉樹材が目立つのも特徴的である。

串(318~392等):103点出土し、75点を図示した。断面形や先端の加工で細分できるが、特徴をとらえにくく細分を標記していないものも11点ある。全点中60点、58%がノリウツギの半割~1/8割材を削り加工したもので、1/32まで割ったようなものもある。他は、ハシドイ属10点、アスナロが9点あり、ツルウメモドキ属・ハギ属・ガマズミ属材のような遺物での出現数が極少の樹種も使われている。12点約1割が櫛心を持つが、基本的には割材から作られるものである。

全点を細分類ごとに樹種で統計して見ると、長串系(369~391等)は25点中20点80%がノリウツギ材である。同じように、楕円串系(319~327等)は13点中11点85%が、細串系(330~344等)は20点中13点65%がノリウツギ材である。ところが、ノリウツギ材の比率は太串系(348~354・372等)では12点中2点で、かえって前点の約1割であるハシドイ属のほうが4点と多い。また、平串系(342~344・356~362・371等)でも13点中6点、うち平串(356~362)に限ると7点中2点しかノリウツギ材はない。太長串372のような重複もあるが、形状を考慮すると、ノリウツギ材の比率の高い長串・楕円串・細串系は、食用具としての串と言えるであろう。対して、ノリウツギ材の比率の低い太串・平串は、食用具以外の用途があると考えたほうが良いであろう。

特徴的な形状では、頭部が股になっている369、頭部に膨らみがある353・355・387、頭部が斜めに削ぎ落される346・359・365・380・383、脇に小さな袂りの入る392があげられる。

運搬具

木札(393):樹皮加工製品で、方形に切り取られたように見える。別の品物に添付した「しるし」のようなものか。

かんじき・かんじき軸(394~398):394は単輪型の瓢箪形「かんじき」の破損品。蛇行状の反りがあり、絞り込みのためと思われる袂りが1ヵ所ある。内側には横軸の差し込み孔が4ヵ所開けられている。モミ属の1/4割材を柾目状にし、穿孔や曲げ等の加工をしている。かんじきは千歳市美々8遺跡低湿部の近世アイヌ文化期対応層からも4点出土しており、いずれもモミ属の柾目材を使っている。「かんじき」の樹種選定と製作技術には、伝統が存在するものと言える。また、美々8例は上下面を平らに加工したり乗緒の固定部に袂りが入るなど、明らかに洗練された形態になっており、当製品が層的にも先行する形態であることがわかる。

395~398は、かんじきの横軸。いずれもノリウツギの1/4割材を削り加工したものである。両端は本体の軸孔に差し込み固定しやすいよう、円錐状に削られている。長さが様々なのは、本体差し込み部の幅によるものであろう。396・398は同一地点の出土で、一体のかんじき横軸と思われる。

紡織器具

機織具(399):機織の糸をそろえる道具ではないだろうか。本体部は断面凸レンズ状に丁寧に削り調整され、両側面に刻目が入っている。各側面で刻目列には違いがあり、密な側にはおよそ25mmと8mm、疎な側には約60mmという単位幅で目が刻まれているようである。つまみ部は両側面から大きくV字に袂り込んで作り出され、断面凸レンズ状に削ってはいない。

祭祀具

刻目入加工製品(400~402):枝材や割材の串状加工製品に刻目を施した製品。刻目は片方の端部にほぼ均等な間隔で一側面に入っている。暦か算木であろうか。類例が少ないので祭祀具に分類したが、日常的に使用する品物かもしれない。

イクバスイ(捧酒篋)(403~439等):55点出土している。削りかけやイトクバ・明瞭な文様などは確認できないが、端部の舌状削りや、片面が平らな断面形から、捧酒篋(イクバスイ)かその原品品と考えた。406・423・429・432には薄く刻線が、434には刻み目が入っている。438・439は片端あるい

は両端がつぶれたような加工であり、イクバスイではないかもしれない。

全点中39点、70%が榎目系（榎目・追榎・榎目をいかす割材）の材である。また、アスナロ材が36点65%、モミ属材が12点22%、合わせて87%を占める。イクバスイにはアスナロやモミ属（トドマツと推定）などの木目の美しい材が好まれている。イクバスイの半数以上が交易で持ち込まれたと思われるアスナロ榎目板材の再加工であるとすれば、祭祀具材料の調達の方法を見直し、祭祀儀礼のあり方検討する一材料となりえる。

模造品（440～443）：440は削り込みはないが全体のフォルムが丸木舟に似ており、舟の模造品と考えた。441は股木の枝部分を切断し、幹側の末先を杓状に削ったもので、側面観や正面観がクマの頭部にも見える。422は榎目板の加工品で、刀模造品の切先か。

443（口絵-1）は形態から早稲か槍先の模造品である。持ち手部は断面円形、水掻部は断面菱形を呈し先端は舌状である。持ち手部端に一周する沈線と列点文、水掻部両肩に二つの刻みとそれを囲む二重半円文が彫刻されている。

木幣（444・445）：2点ともモクレン属の枝丸木材を加工している。削りかけなどは残っていないが、先の段に向けて細く削り込まれ、段部でその削り込みがきれいに落されていないように観察できることから、木幣（イナウ）とした。444の先端は尖り、445は平らに削られている。

各種加工製品（各種用具の部品等）

ピン状製品（446～448等）：446は装飾品の一部か、材の形状を活かした頭部のある細枝加工の小品。447・448も枝節の膨らみを活かして頭部にした、ピン状の製品。

軸状製品（449～461等）：車樞受台部の軸のように明瞭な頭部や摩耗痕がないもの、串とするには太いもの23点をここに分類した。454は加工・形状から太串としてもよい。図示したものでは449は大型楔状、453は両先角軸、461は三角軸で、他は丸軸といえるが、451・459は端部方形である。材では、丸木材（枝材）が15点、割材8点で、2：1の比率である。

樽酒甕状製品（462～469等）：イクバスイに似るが、厚さ・幅・長さなどからそう分類しきれないものをいう。29点出土している。462はイクバスイとしてもよい。材でみると全点中20点、69%が榎目系である。また、アスナロ材が12点41%、モミ属材が8点28%、合わせて69%を占める。これらはイクバスイとほぼ同傾向に表れているので、イクバスイの分類枠を広げるか、この製品を細分化して対応すべきことかもしれない。

榎状製品（図未掲載）：丸木の半割材の樹心周辺を削り削って榎状にしたものの破片。I B 4層でも出土していた。導水や排水のための榎が敷設されていたのかも知れない。

枝材加工製品・細枝材加工製品（472・474・476等・図未掲載）：472は元末を切断した170cmほどのサルナシ属（マタタビカ）の枝を環状にして輪を作ったもので、3ヵ所に曲げ折れがある。他の26点の枝材加工品は474・476のように、端部に様々な削り加工があるもの。細枝材加工製品は10点で、枝材加工品と同様に軸状製品や串などに包括できないものである。

丸木材加工製品（490等）：挟りや孔がなく、丸木の太さや長さを活かした製品。490は枝別れ部を切断して頭部を作り、末側を削りてまとめているバット状の製品である。

挟付丸木材加工製品（475・477等）：加工部や体部に様々な挟りが入った丸木材の加工品。475は削り加工の入った端部に横方向の幅広い挟りが入ったもの、477は体部の2ヵ所に階段状の片挟りが入ったもので、建築部材の可能性もある。

丸木材両端加工製品（480～483等）：5点出土している。他の丸木材加工製品と違い、すっぽりに切断した丸木材の両端を円丘状に削り加工したもの。長さで中（未掲載2746）小（481

～483)があり、小型の481～483を見るとほぼそろいの規格があったようである。ゴザ編み等の縁になるものであろうか。

有孔丸木材・割材加工製品 (484・487～489等)：484と489は、平坦な2面とその平坦面を通すように端部付近に角孔の開けられた製品で、丸木と割材の違いはあっても、類似した形態を持つ。487・488は両端部付近に角孔の開けられ、両端部の同一面に半割状の挟りが入る左右同形の同種の丸木材加工製品である。この製品は、窓枠などの建築部材の可能性もある。

心持材加工製品 (478・479等)：478は厚板状。479は多面に粗い削りの入ったもので、未製品と思われる。6点の未掲載品には有孔のものもある。

両端付付割材加工製品 (485)：左右対称の薄い作りの小品で、何らかの部品であろう。両端部に両側からのV字刻み状の挟りが入り、本体との固定部を作る。中央部に節を利用した受口状突起があり、ここにこの部品の役割があるものと思われる。

挟付割材加工製品 (486・492～496等)：486は板状の材の側縁に挟りがある。形状からみて割り物を筧状に再加工したものか。492～496の端部付近の挟りは固定部と見られ、何らかの部品かあるいは部品を取り付けるものと考えられる。492は接合していないが両端に挟りがあるもの、493～495は二段挟りのもの、496は溝状の挟りが半周するものである。

半割材加工製品 (497～501等)：基本的に半割材の樹心部付近を残す製品。全16点で、幅8.1～1.8cm・厚4.1～0.7cmと大小様々である。半割後の加工法も、主に側面側を削るもの(497・500等)、側面も削るもの(498・499等)、半割形状を活かすもの(501等)など様々である。499の側面には2ヵ所に刻み目が入っている。

割材加工製品 (491・502～521等)：挟りなどがなく、割材の形状が残る製品。全133点で、幅10.3～0.7cm・厚6.9～0.5cmと大小様々である。1/4-1/8-1/16-1/32割材(1/4割系)が90点68%、1/6-1/12割材(1/6割系)が33点25%と2系統で大半で占めるが、木取を半割とすべきものも9点ある。これは、半割後に1/4割系や1/6割系以外で側面を割ったり(505等)、側縁を偏割りで落すものである。この加工法は主となる2系統にも使われていて、517～521はこうして作られた細い角材である。491・502・503・510などは特に割材の形状が残る製品、508・509などは板状に近く割材の形状がやや不明瞭になった製品である。516は同グリッドから出土した12地点のハリギリ材製の1/4割材加工製品。加工や形態の類似、接合等から同一製品の部品と判断した。

偏割材加工製品 (522～526等)：樹心を通らない偏った割り方をした材からの製品で、その原材料は丸木・半割材・割材である。全18点で幅7.8～1.1cm・厚5.0～0.9cmと大小・形状とも様々である。

有孔細板加工製品 (527)：片面が平坦で、端部が薄く削られ、2個の角孔が開けられているベルトの先端のような形状を持つ。形状どおり、留め具の破損品であろう。

細板材加工製品 (528～530等)：5点中4点が柾目の板。528は全体の1/3ほどが幅半分になり、柄杓になり、包丁形の形状を呈する。529は板目の細板で、山形の端部付近に小孔が開けられているベルト形の製品。530は同グリッドから出土した4枚のモミ属細板で、3枚が接合し同一個体となった。この2点は、長さ1m近くがほぼ均一の幅になるよう加工されている。

挟付板材加工製品 (531～539等)：挟りの浅深・かたち・数・位置などに違いはあるが、挟りの入った板材の加工品をここで取り上げた。比較的幅の狭い531～536等が柾目系、幅の広い537～539が板目となっている。

531は両端を楔状に加工し、傾斜面側に幅広の溝が横断するもので、結合用部品と思われる。532・534は片面中央付近に浅い挟りが1ヵ所入るもの。533は片面に幅広の溝が横断するもの。535・536は

斜めの頭部と柄部を持つもので、535は深い抉り、536は削り落としのような抉り込みが入る。537は薄く篋状に加工された製品で、両側縁に浅い緩やかな抉りが入る。この抉りを結ぶように1本の刻線が両面を横断し、上部にはやはり両面に斜め方向などの刻線が施されている。538・539は平面卵形の厚板材加工品で、頂部に緩い抉りがあったように見受けられる。538の片面にはX状に交叉した擦痕が見られる。ゴザ編み等の鎌か網の浮子と思われる。

有孔板材加工製品（図未掲載）：下記の板材加工製品にはない孔が開いているので別分類した。

板材加工製品（540～561等）：抉りや孔などがなく、板材の形状が残る製品。全124点で、幅11.8cm以上～2.0cm以下・厚2.9～0.3cmと大小・形状とも様々である。木取は榎目62点50%、板目52点42%、追衿9点7%の割合である。樹種ではモミ属（トドマツと推定）33点27%、ハリギリ27点22%が突出して多い。板材への加工し易さがこの樹種の材にあるということだろう。8点のアスナロ（541等）と1点のスギ（560）材の出土は、交易等で得た製品の材を再利用しているということである。

図示したものとみると、540～544は厚板材加工で、542は浮子？、544は「まさかり」状で横樋の可能性はある。545・547・550・553～556・560・561は長尺板材の加工品で、547は刀形？、550は櫓木撥部の可能性がある。555の両面には放射状の傷が多数見られる。560はスギ板で端部に釘孔らしき小孔があり、箱材の再利用と思われる。561は大型の加工品で、先尖りや整えられた形状から何らかの大型部品と言えよう。551・552・557は幅広板材加工品で、住居や舟に関わる可能性がある。548・549は小型品で、549は両端が逆向きの楔状になる。

有孔板加工製品（562～566）：板加工製品のうち孔が開いているもので、大きさ・厚みや樹種からすべて板綴舟の舷側板と考えている。562は1・2の2点あり、ともに触近くの舷側板であったと思われる。562-2は大型篋状に加工され、横方向の擦痕が見られる。564は柄状、他は板として再利用されている。孔が利用されているか否かは不明。

板加工製品（567～571）：567は杓木状、アスナロの榎目の板加工で、箱板の再利用であろう。568・570は台板か。571はカーブのある一辺から見て、桶底板の再加工品と思われる。

榎目板加工製品（572・573等）：572-1は半割落としと斜めカット、572-2は小孔、573は斜めカットと厚み調整を各々、榎目板に施した加工品。

素材

榎目板（574～599等）：曲物や折敷などに加工され得る榎目の薄い板を集めた。一地点からの複数出土も含めて、497個体確認している。幅は、9.45～2cm以下と様々だが、3cm前後が平均的である。樹種は、アスナロ453点91%と大半で、他ではモミ属25点5%が目立つ。これにスギ8点、トウヒ属2点を加え、針葉樹材が98%を占める。地場産ではないアスナロとスギで93%あり、供給を交易に依存していたことがわかる反面、7%は地場産でまかなっていたことも確かで、曲物等を自家生産しようとしていたことも窺える。

594は最も幅広い材、577・585～599は幅狭い材の代表である。574～578・588・593は30cm以上の長さを残すもの、579～584は若干の加工が入ったように見受けられる材である。

薄板・細板（図未掲載）：木取や加工度の違いなどから榎目板に分類できない薄い小型・細型の板だが、榎目については次段階の加工によって同じものになるのかもしれない。

有孔板（600～604等）：600は薄板で角孔がある。604は円孔であろう。600～603は角孔で板綴舟の舷側板であった可能性があるが、薄くなっている・小さくなっている・節があるなどの点で、舷側板との決め手を欠く。

板 (605~614等) : 板そのものとして使用されたと思われるもので、全44点の内訳は柾目系19点、板目25点である。図示したものは少なくとも一辺は直線辺が見られるものである。608は50cmで、609は1mを超えるであろう長尺板である。他も安定した幅と厚みがあり、図示したものは住居や舟に関わる可能性がある。93%41点が広葉樹である。

板材 (図未掲載) : 板とするほど厚みに均一性がなく、板や加工品の素材となるような材。全158点の内訳は、柾目系78点、板目80点とほぼ半々である。板とほぼ同じく、94%149点が広葉樹である。アスナロやスギが混在するのは、交易で得た板を加工する中途段階のものがあるのだろう。

割材 (図未掲載) : 全415点で、幅11.3~0.6cm大小様々であるが、割材加工製品とは素材と製品の関係から同規模である。1/4-1/8-1/16割材 (1/4割系) が269点65%、1/6-1/12割材 (1/6割系) が106点26%と2系統で大半を占めるが、木取を半割とすべきものも35点ある。これは半割後に1/4割系や1/6割系以外で割面を割ったり、側縁を偏割りで落すものである。この方法は主となる2系統の二次加工にも使われている。これら木取構成割合も、素材と製品の関係となる割材加工製品と同様の比率を示している。小片の中には切片・木端として扱わねばならないものが混入している可能性はあるが、樹心を割る意識の見えるようなものは割材としてある。

偏割材 (図未掲載) : 樹心を通らない偏った割り方をした材で、その原材は丸木・半割材・割材である。全153点で幅10.5~1.2cmと大小・形状とも様々である。切片として扱わねばならないものも一部混入しているであろう。

半割材 (図未掲載) : 全101点で、幅20.5~1.4cmと大小様々である。幅15cm以上のものも3点ある。1/4割や1/6割という次段階の元材が含まれている。焼痕のあるものが17点と比較的多いのは、加工法との関係であろうか。

心持材 (図未掲載) : 樹心を残して割った材で、17点出土している。割ったもう一方は偏割材となる。割材・偏割材という次段階の元材が含まれている。

細枝材 (図未掲載) : 最大径が2cm以下の枝材で、明瞭な切痕をもつ材 (65%) と折れ材とがあり、股木材もある。全403地点で、焼痕のあるもの12点3%、樹皮を残すもの30点7%と少ない。細枝材のみの集中・集積が3ヵ所あり、建物の屋根や壁の一部ではないかと推定している。

枝材 (図未掲載) : 最大径が2~4cmの丸木材で、明瞭な切痕をもつ材 (66%) と折れ材とがあり、股木材もある。全694地点で、うち焼痕のあるもの59点9%、樹皮を残すもの47点7%となる。

丸木材 (470・471等) : 最大径が4cm以上の丸材で、明瞭な切痕をもつ材 (48%) と折れ材・割れ材とがあり、股木材もある。全232地点で、焼痕のあるもの85点37%、樹皮を残すもの19点8%と、焼痕のあるものが高率となる。470は切痕と切断痕が明瞭な材。すづまりで木端にすべきものか。471は太材を切り出した状態の部分であろう。

焼痕のあるものが、細枝材・枝材では一割未満であるのが、丸木材では1/3を超す。対して樹皮を残すものは、一律に7~8%しかない。また、明瞭な切痕をもつ材は細枝材・枝材では2/3近いが、丸木材では半数以下である。これらは丸材の太さによって、切り出し方や貯木の方法、加工の仕方に違いがあることを示すものであろう。

竹材 (473) : 60cmを超える細い竹材で、節部で折れている。柄にしたものかもしれない。当地ではタケは自生せず、本州等から持ちこまれた材である。

建築材

柱 (615~640等) : 直径がおよそ6cm以上で長さがおよそ2mかそれ以上、桁・梁の受け部や柱根の削りのあるもの、あるいはこれらの条件を満たすと推定できるものを柱とした。48本出土しており、

樹皮の付いたものも12本ある。他に建材に分類したものの中に柱の可能性のあるものが11点ある。いずれも木元側端部に削り加工がある。削りは一部に樹表面を残すものが多く、削り面数は1面が621・623・636・640、2面が618・617・622・624、3面が624・626・629・633、4面が616・630・634、5面が639、6面が625、7面以上の多面型が627・632・637・638と多彩である。コナラ属16本33%・トネリコ属14本29%・ハシドイ属5本10%・ニレ属4本8%という樹種構成で、この4種で80%を占めるほかは他に4種しかなく、樹種選択はほぼ限定されていると言ってよいであろう。

618は径18cmを超える太さの巨木で、実測図は加工のある部分を掲載した。大型の建物の柱か桁材であろう。615・616・620・625・628・633・634・638・639は径10cm前後の太柱。615は頭部に面削り加工、620・629・635は組み合わせ用の半割り挟り込みや挟り加工がある。616・617・622・623は桁や梁の受け部(股木部)を持つ。

建材(641~698等)：桁・梁や垂木など、建物の大枠を組む柱以外の材で、169本出土している。柱の可能性のあるものも11本含まれている。樹皮の付いたものも30本ある。長さや短部加工・材受け部加工などから、使用部位を検討したが、認定しきれないものが多いため、建材という範囲で取り扱う。分けきれない重複のまま分類して見ると、垂木10本・桁56本・梁57本で桁・梁総数は約70本である。トネリコ属59本35%・ヤナギ属25本15%・コナラ属20本12%・ハンノキ属12本7%・イヌエンジュ10本6%の5種で75%を占めるが、他に14種もの樹種が出現しており、群を抜いて多いのが汎用材のトネリコ属・ヤナギ属であるなど、樹種選定は特になされていないと思われる。強いていえば、コナラ属・イヌエンジュに建築材選定の特徴を見い出せるか。

641・642・645~649は3~4m級の長材で、加工は粗い枝落としと元側端部の削りのみであり、屋根の垂木と推定される。693も短いが形態的には垂木で、継いで使ったものであろう。

650~652・655は2m以上、653・654・657・670・671・680は2m級、663・672~675・681~686・691は1.5m級、676・687~689・692は1m級の桁材・梁材であろう。破損や弯曲した材も多く、枝落としや端部の削り加工だけのものがほとんどであるが、658・661・670・675~675・680・686・690・691の端部には組む際の挟り込み、654・673・687~689の材固定用の枝元削り残り端部、643・644・664・679・688の交叉部の緩い削り、685の端部細化加工、659の継ぎ足し部加工は特徴的である。676の挟りは両脇から入れられている。690はぼぞ孔?や一周する挟りなど他に見られない形態で、材質もアスナロであることから、建材以外の用途を検討すべきかもしれない。656は径25cmを超える太さの巨木材で、大型の建物の桁材であろう。

694~698は股木材加工の補助的な建材。695は直交する2ヵ所の受け部を持つ。696には659のような反割削りの継ぎ足し部加工がある。

建築部材(699~735等)：建物の大枠に組み込む細部の材。80本と3組が出土している。屋根や壁の横架材66本のほか、整った加工ながら他に用途が見込めない長めの割材や有孔材などがある。他の分類で取り扱った有孔の製品65・164・166・167・475・477・484・487~489など建築部材の可能性のあるものは、一覧表の備考欄に示してある。トネリコ属29本36%・ヤナギ属9本11%・コナラ属6本7.5%・ハシドイ属6本7.5%・モクレン属5本6%の5種で69%を占めるが、他に12種もの樹種が出現しており、群を抜いて多いのが汎用材のトネリコ属であるなど、建材と同様、樹種選定は特になされていないと思われる。

699~722は均一の太さで両端を削りなどで加工した横架材。長さで見ると、699は1.2m以上、700~703・722は1m前後、704・705は90cm前後、704~709・714は80cm前後、710~712・716・718・720・721は70cm前後、717・719は約50cmと、ほぼ10cm刻みでそろいの長さがある。使用部位や建築規模の相違に

依るものであろう。723・725～727は細長の割材加工部材。728～731・733は幅広の割材加工部材で、728・729・733には材受け部の挟り加工がある。724は両端部に、732は中間部に角孔が開けられ、前掲の有孔製品10点(65等)ともども窓枠材等の使用部位が推定される。734は有孔有段の板で、壁板と思われる。735は大型の台形突起付き割材加工部材。体部には擦痕・刃痕がある。未掲載の細枝材の集合3925・5369・5370は、屋根材や壁材かと思われる。

股木杭(736～764等)：46本出土している。股木端部に切断痕、元側端部に削り加工があり、削り面数は1～多数ある。樹皮の付いたものも12本ある。トネリコ属13本28%・ハシドイ属8本17%・イヌエンジュ6本13%・ヤナギ属・ニレ属・ほか7種という樹種の構成で、ハシドイ属・イヌエンジュに特徴を見い出せる。梶原地方ではイヌエンジュ材とハシドイ材を混ぜて家の柱を作ったという(知里1953)。

736～742は長さほぼ1.5m以上の長尺杭、743・744・747・749～751は長さ1m前後の中尺杭、752・753・757～759は70cm前後の短尺杭である。754～756は股部の開き角度や太さのバランスがよく、杭体部が短いもの。760・763は股部の開き角が偏り、枝の張出しが物掛け状になる長中尺杭。745は長中尺杭の股部、746・748・761・762・764は刺し杭としての股木杭で、762の枝はほぼ90°に張出し、物掛け状になっている。

杭(765～774等)：27本出土している。太さ5cm前後のもので、端部加工や枝落としては柱・股木杭と変わらない。木元側を杭先としている(先のみで判別できないものもある)ことが多い。コナラ属5点19%がやや目立つ程度で、全13種と樹種選定に特別な意識はないようである。コナラ属材は、後述の細杭・刺し杭では激減することから、より太さを必要とする材として使われたと言える。

765は先部分は太いが、体部は細く屈曲しているので、柱ではなく杭とした。767・772は頭部に材受け部として、柱629のような半削りの挟り込み加工がある。

細杭(775～781等)：85本出土している。太さ3～4cmぐらいのもので、端部加工や枝落としては杭と変わらない。780の頭部は受け部加工か。トネリコ属30本35%・ヤナギ属13本15%・ハシドイ属12本14%・ハンノキ属8本9%・その他14種という樹種構成で、細材の採りやすさからか、ヤナギ属・ハシドイ属の材が目立つ。

刺し杭(782～802等)：51本出土している。手で刺して使う短めの細杭で、建材類に含めるべき物ではないかもしれない。端部加工や枝落としては杭と変わらないほか、頭部も削りで調整している。上半部が枝別れや曲がり等で特徴付けられるもの(782・783・789・791・794・796・800等)があり、これらが引っ掛かり・固定などの役割を果たすのであろう。トネリコ属12本24%・ヤナギ属12本24%・ハシドイ属7本14%という樹種構成で、細材・短材の採りやすさからか、細杭に比してヤナギ属が増加し、トネリコ属が減少している。

樹皮

樹皮加工製品(803・804)：展開すると楕円形になる樹皮加工製品である。803は丁寧に切り取られているが、804はやや粗く丸みを欠く部分がある。両者とも周縁部に小穴列がある。包み材か何らかの本体に対しての張り当て材であろうか。

帯状樹皮(805～812)：8点とも幅を細く揃えられた樹皮製品。805は細長いシート状、806～808・811・812は帯状固定材だろう。806・807には刻線(傷か)が見られる。809は紐状の縛り具、810は留め環と思われる。

樹皮巻(813～816等)：取上げ地点で26点ある。当初から幅を設定して幹から採集したものが、丸まった状態で残ったもの。採集対象の樹種や幹の太さによって、幅・太さや巻き方が変わって来る。図示したものは巻の状態から、双渦巻状(813・814)と渦巻状(815・816)に分けた。縛り材・固定材や

燈火用に使われるものである。

樹皮(図未掲載)：取上げ地点で27点ある。形態は、小片・切片・細片などさまざまな形で、剥がされたと思われる以外の加工はない。炭化したものや焼痕のあるものもない。

廃材等

剝材(図未掲載)：偏剝材の極端なあり方で、薄く樹皮近くを剥ぐように割った材。さらに加工できないような材なので、切片ともいえる。26点出土。

切片(図未掲載)：製品製作や材料切断などの作業時に出る、割削片。細かく割れ計測不能のものも多い。作業場所であるのか、集中して出土する地点も83ヵ所ある。取上げ地点で557点を数える。

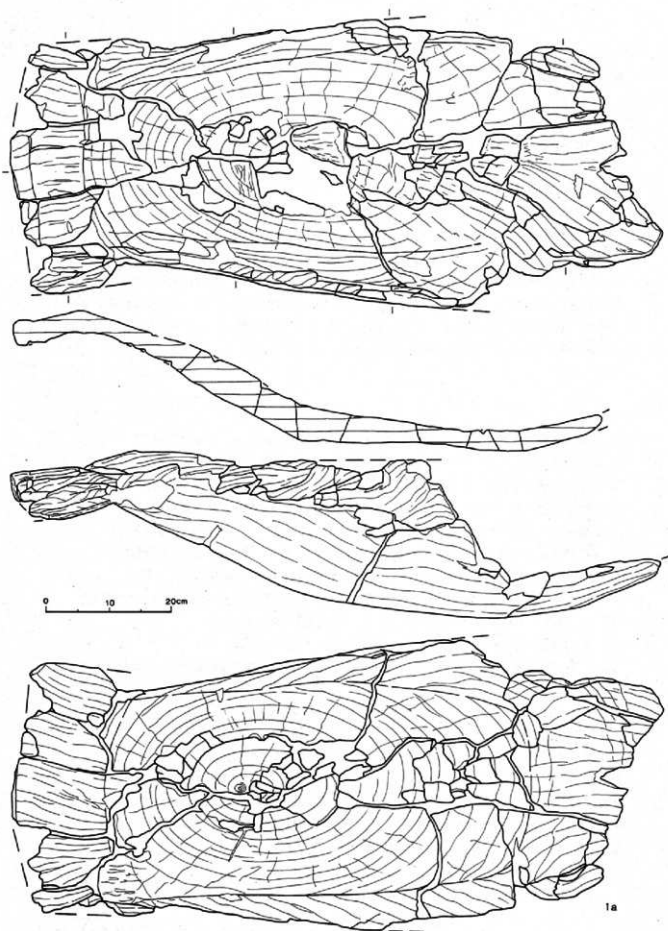
木端(図未掲載)：製品や材料の割削片。細かく割れ計測不能のものも多い。取上げ地点で99点あり、集中も14ヵ所ある。

炭化材(図未掲載)：取上げ地点で35点ある。このうち材としてほとんど形状をなせず、炭化材破片の集中状態で確認されたものが5点ある。一覧表ではこの5点は、備考に範囲の規模を記録した。10×10cm以下のものも3ヵ所ある。割材と丸木材は、炭化や乾燥等による崩壊を考慮してもほぼ半々である。樹種が認定できたものは26点で、約半数はトネリコ属である。

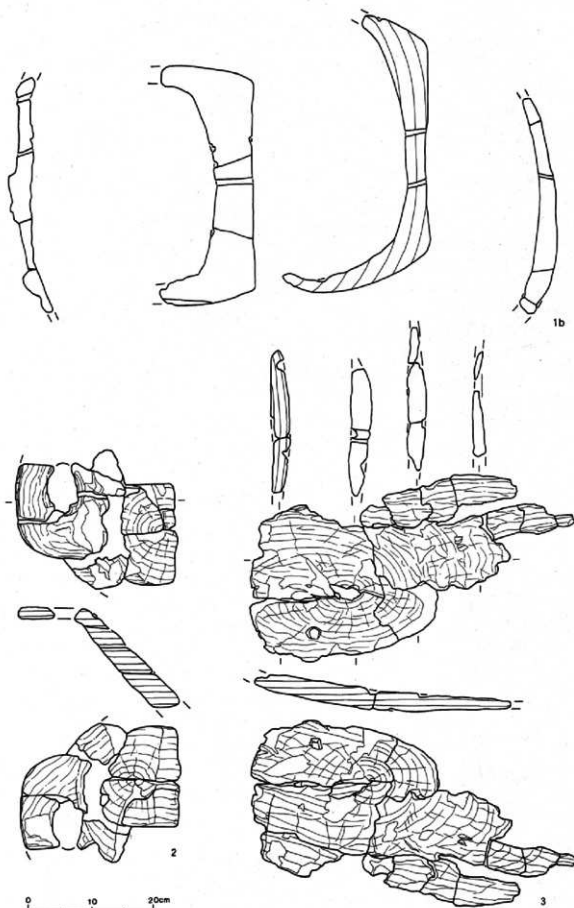
(三浦)

引用参考文献

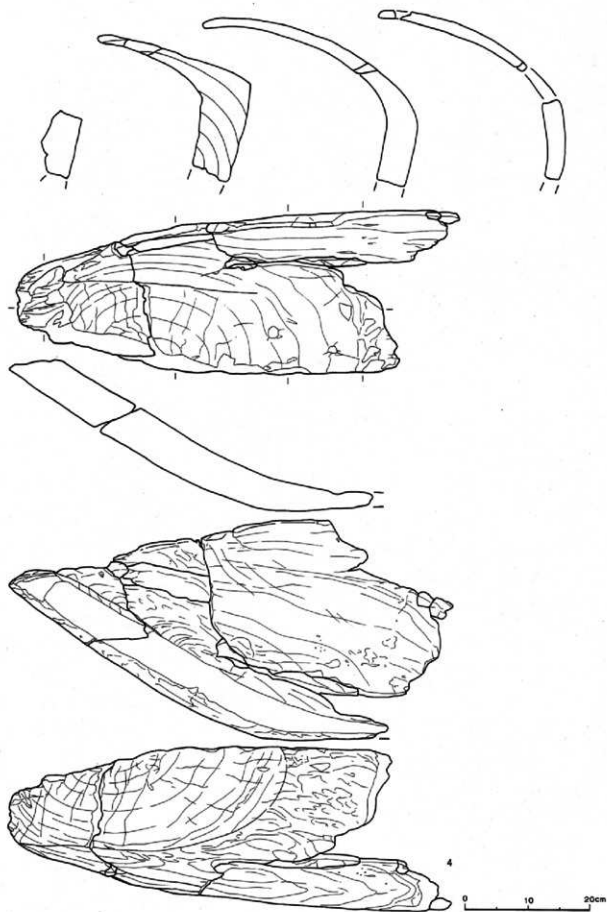
- 財 北海道埋蔵文化財センター 1993 『美沢川流域の遺跡群ⅤⅥ』北埋調報83
財 北海道埋蔵文化財センター 1996 『美沢川流域の遺跡群ⅦⅧ』北埋調報102
財 北海道埋蔵文化財センター 1996 『千歳市オサツ2遺跡(2)』北埋調報103
財 北海道埋蔵文化財センター 1997 『美沢川流域の遺跡群ⅨⅩ』北埋調報114
財 北海道埋蔵文化財センター 1998 『千歳市ユカンボシC15遺跡(1)』北埋調報128
財 北海道埋蔵文化財センター 2000 『千歳市ユカンボシC15遺跡(3)』北埋調報146
大飼哲夫・武笠耕三 1953 「アイヌの丸木舟の作製」『北方文化研究報告第8輯』
知里真志保 1953 「分類アイヌ語辞典植物編」(1976「知里真志保著作集別巻Ⅰ」平凡社)
萱野茂 1978 「アイヌの民具」アイヌの民具刊行運動委員会編
氏家等 1985 「北海道の民具」『北海道の研究7 民俗・民族篇』
山田昌久ほか 1999 「浄法寺町漆文化収蔵庫収蔵品調査」『人類誌集報1999』東京都立大学人類誌調査グループ
東京都立大学人類誌調査グループ 1997 「人類誌集報1997」
東京都立大学人類誌調査グループ 1999 「人類誌集報1999」
日本観光文化研究所 1975 『あるくみるきく103特集日本のうつわ』
仲田茂司 1999 「東国中世の漆器」『考古学研究46-1』
北野信彦 2000 「生産技術面からみた近世出土漆器の生産・流通・消費」『日本考古学9』
中山正典 1993 「曲物の製作技法と形態」『食生活と民具日本民具学会論集7』
奈良国立文化財研究所 1985 『木器集成図録 近畿古代篇』



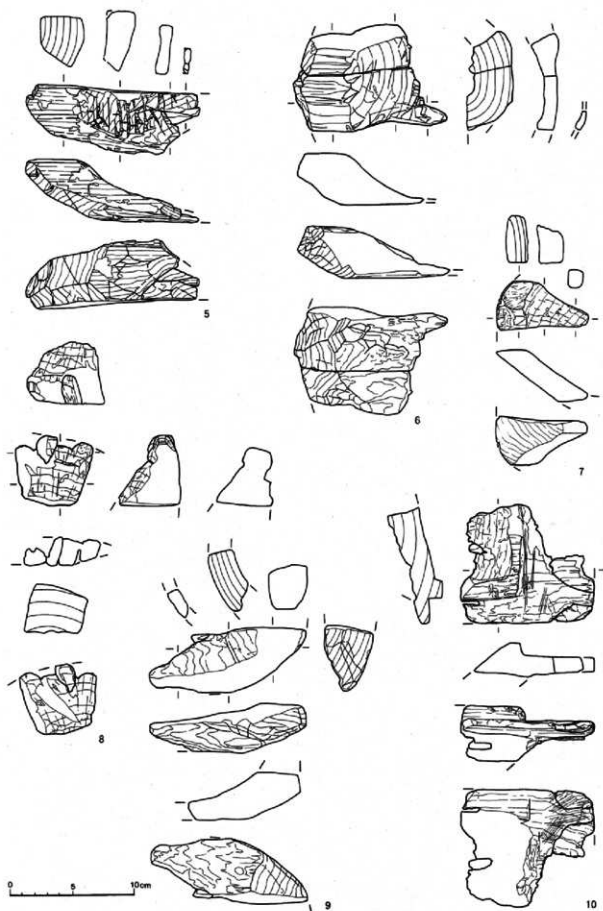
圖IV-9 IB3層木製品(1)



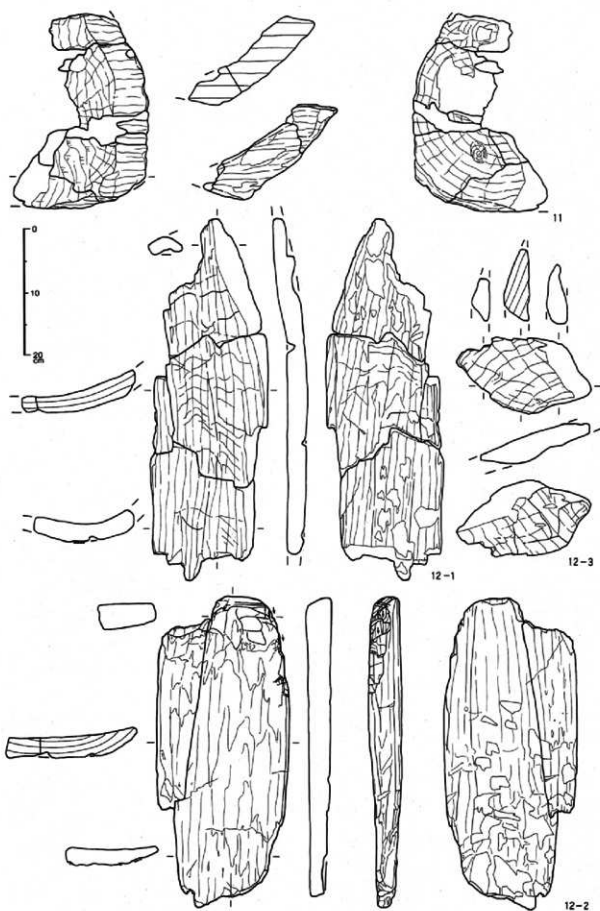
图IV-10 I B 3 層木製品(2)



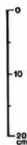
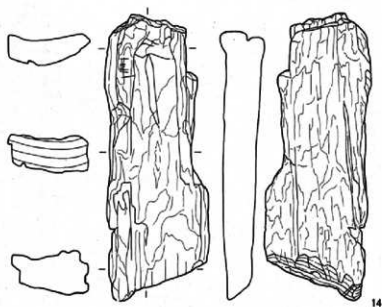
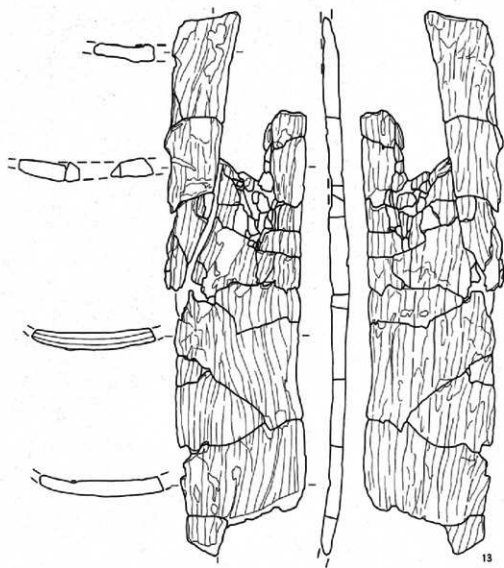
图IV-11 IB3層木製品(3)



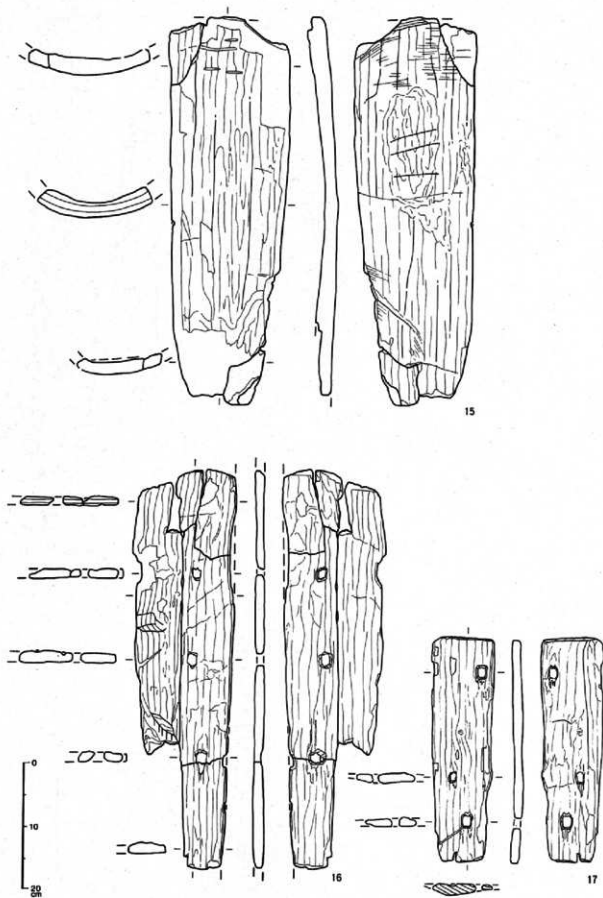
图IV-12 IB 3 層木製品(4)



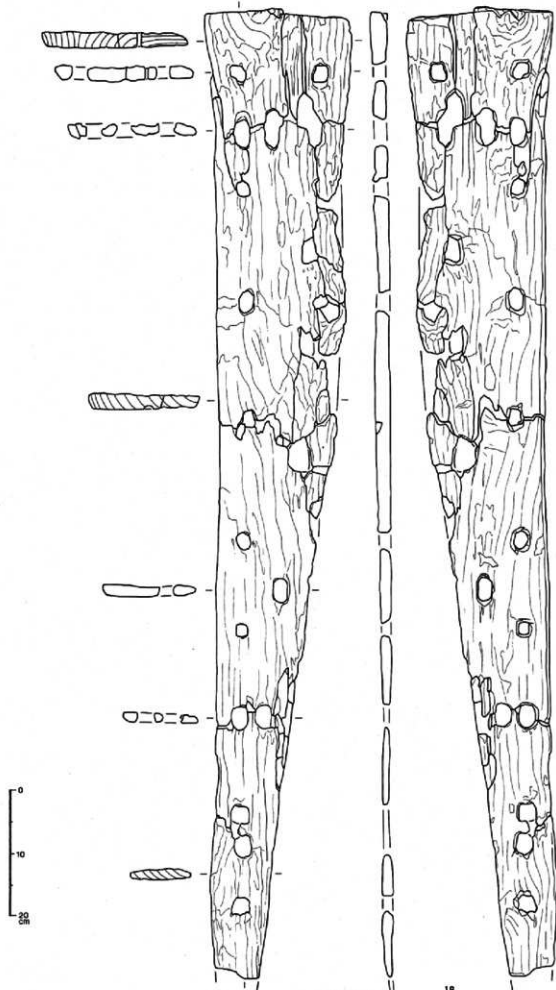
图IV-13 I B 3層木製品(5)



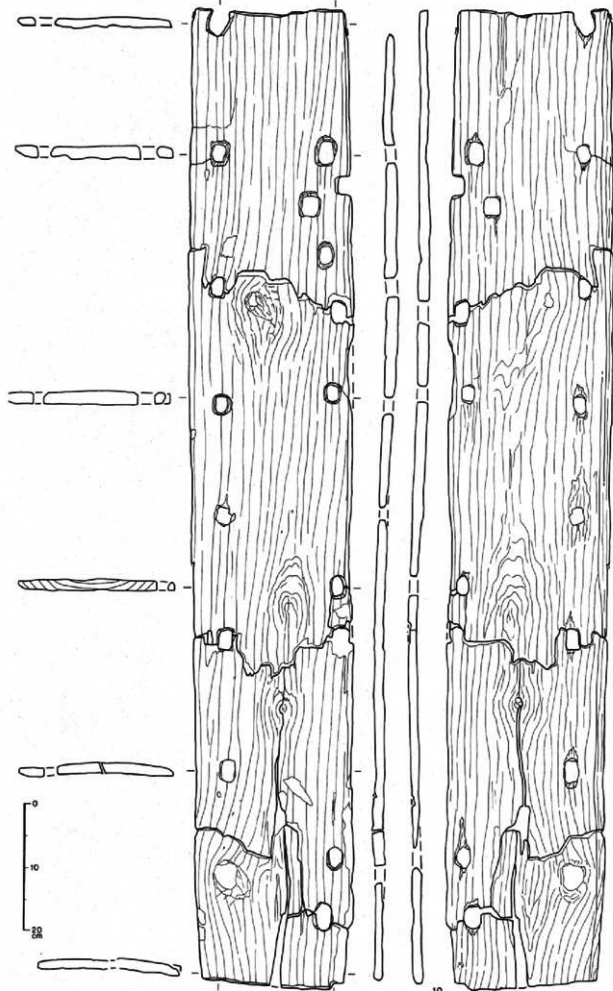
圖IV-14 IB3層木製品(6)



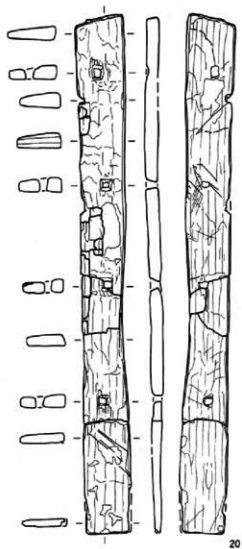
圖IV-15 I B 3層木製品(7)



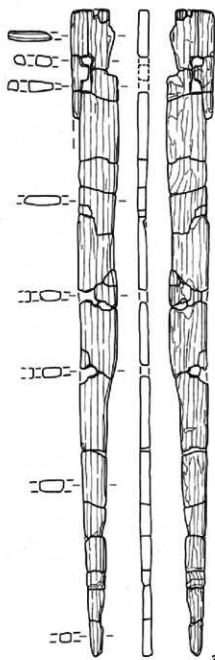
図IV-16 IB 3 層木製品(8)



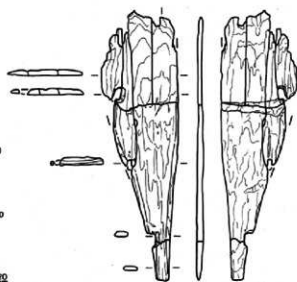
图IV-17 IB3層木製品(9)



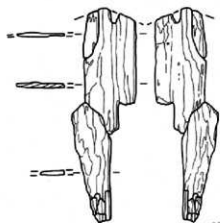
20



21



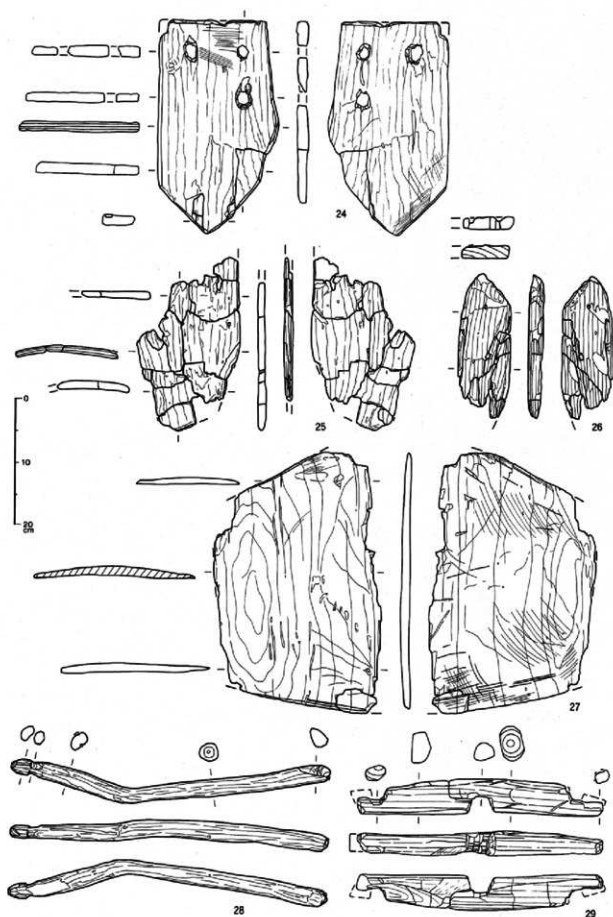
22



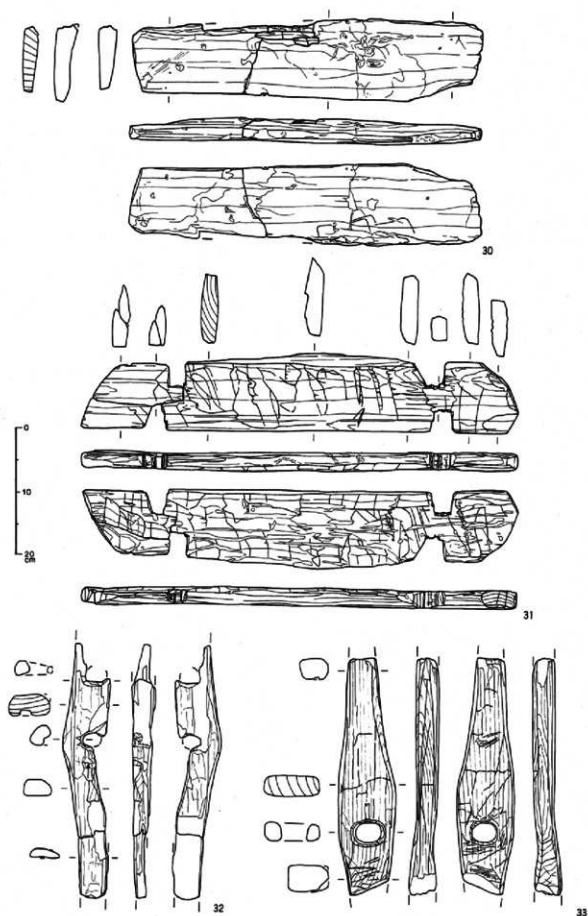
23



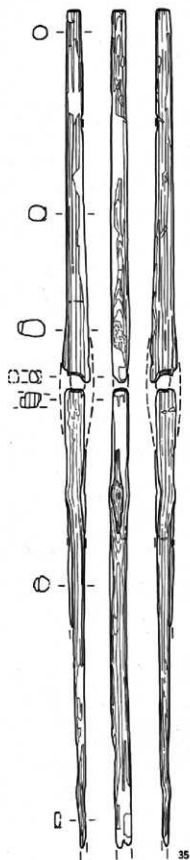
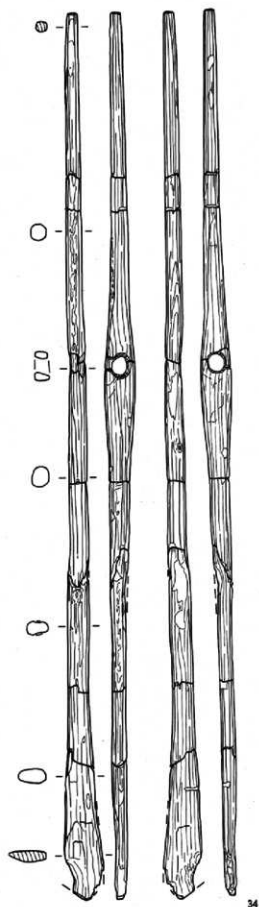
图IV-18 I B 3 層木製品(10)



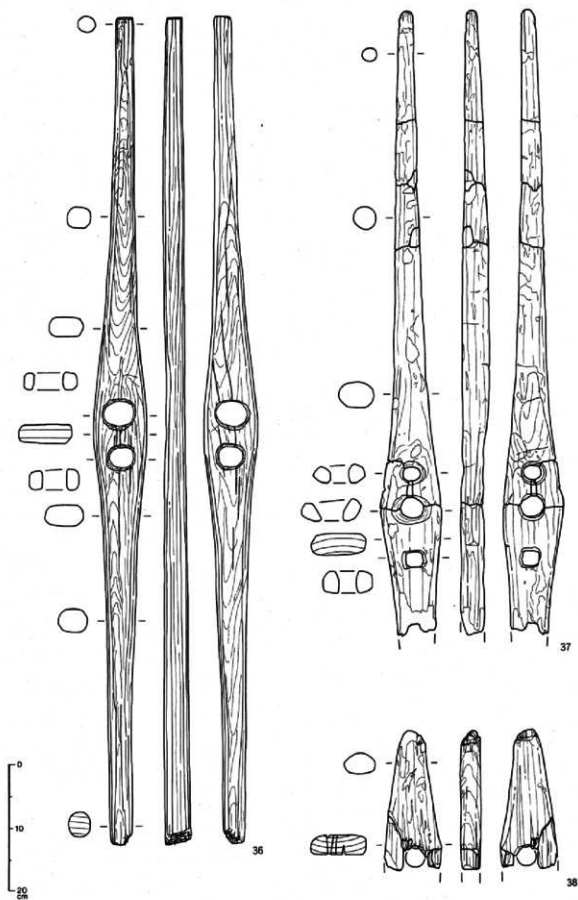
图IV-19 I B 3層木製品(11)



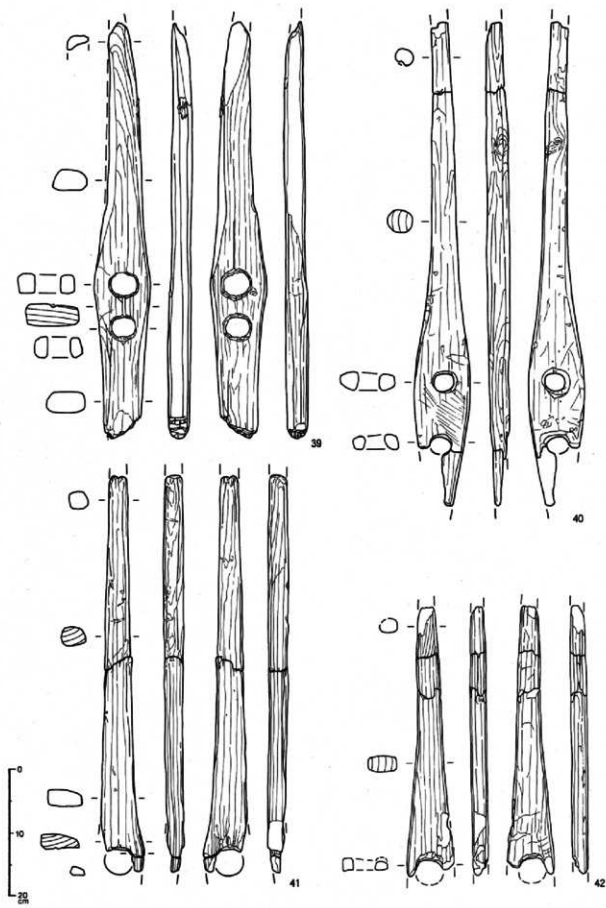
図IV-20 I B 3層木製品(12)



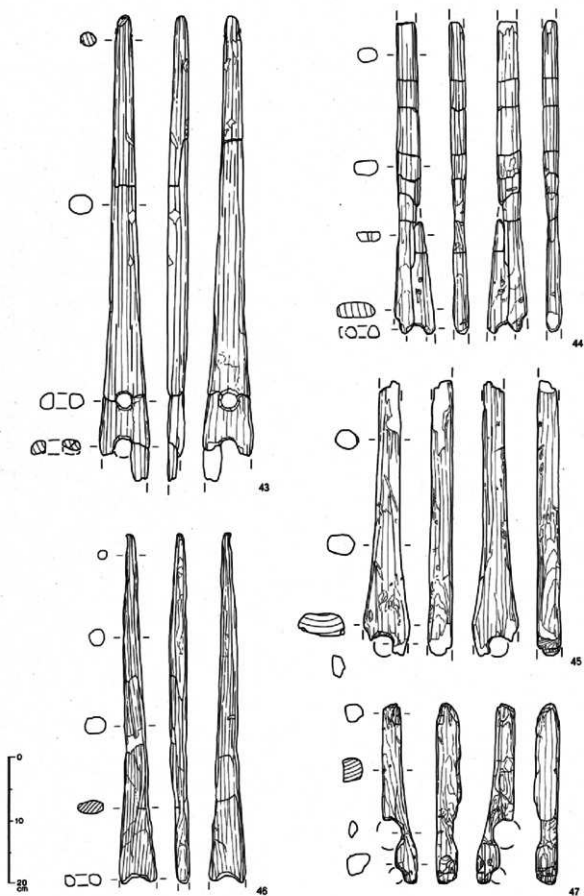
图N-21 I B 3 層木製品(13)



图IV-22 I B 3層木製品(14)



图IV-23 I B 3 層木製品(15)



図IV-24 I B 3 層木製品(16)

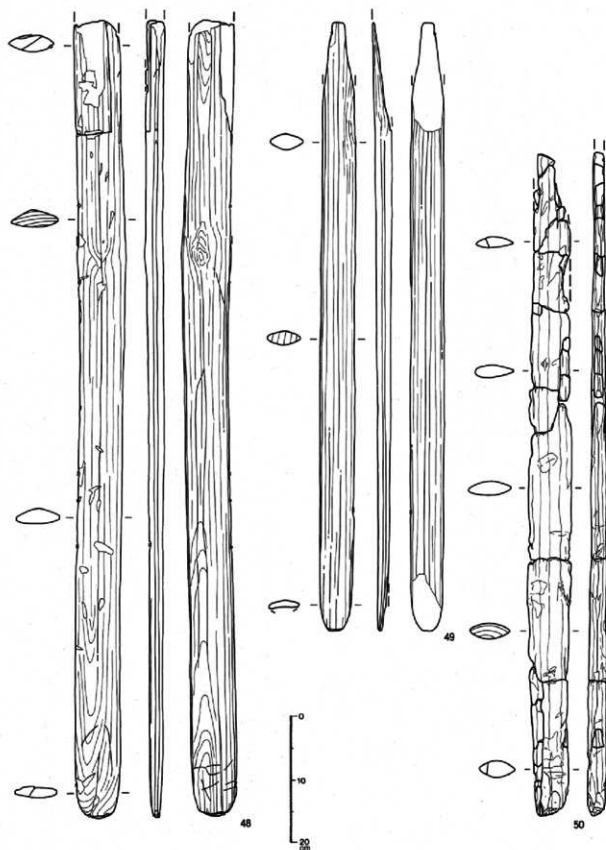


图 IV-25 I B 3 層木製品 (17)

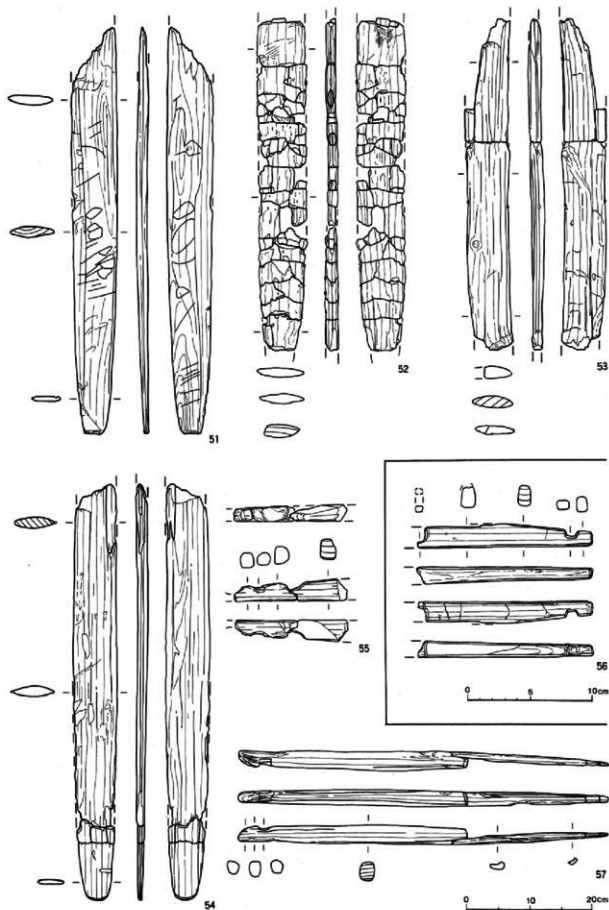
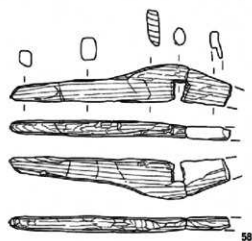
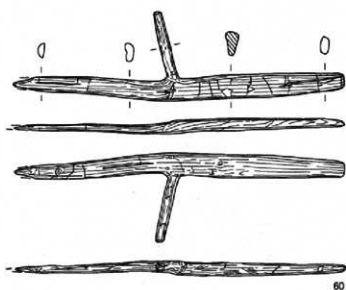


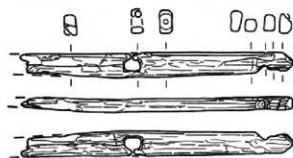
图 IV-26 I B 3 層木製品 (18)



58

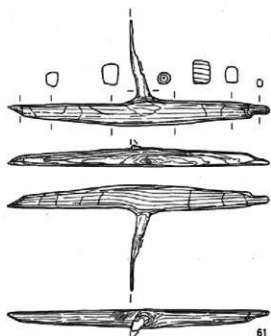


60

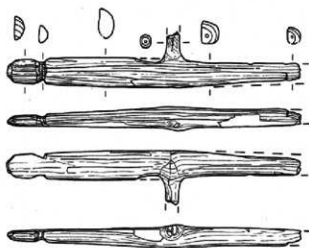


59

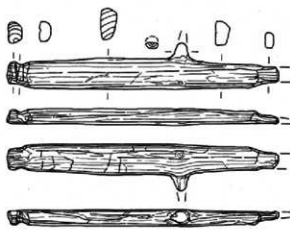
0 10 20cm



61

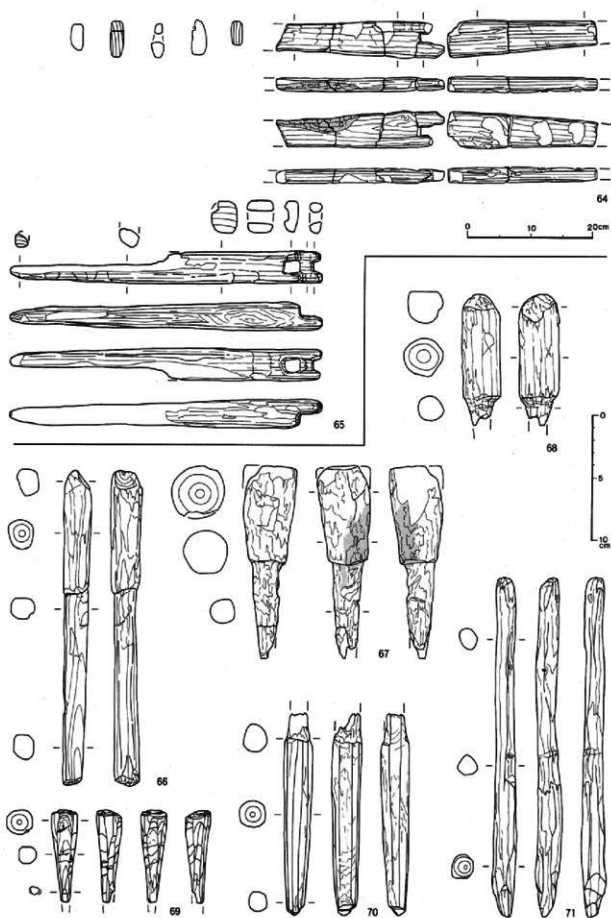


62

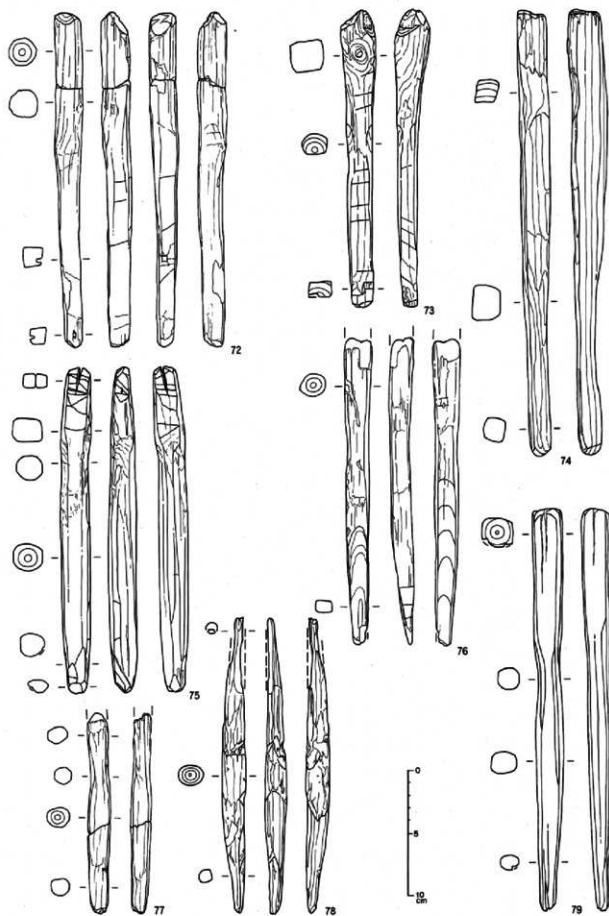


63

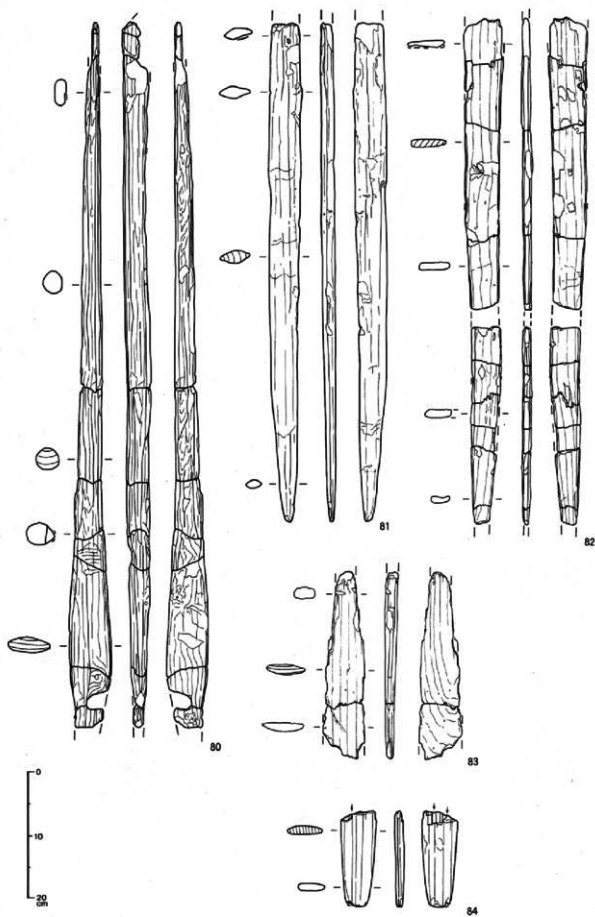
圖IV-27 I B 3 層木製品(19)



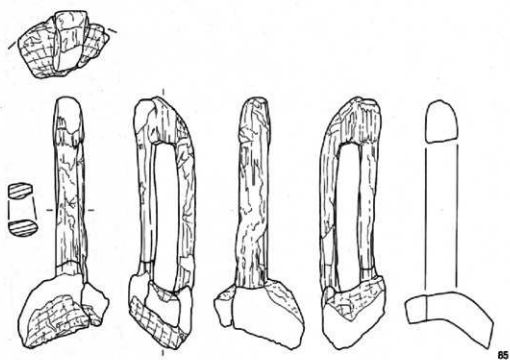
图IV-28 I B 3 層木製品(20)



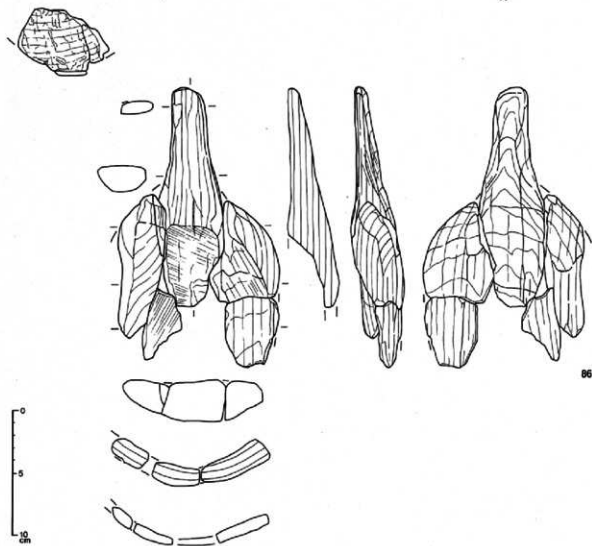
图IV-29 IB 3 層木製品(21)



图IV-30 I B 3 層木製品(22)



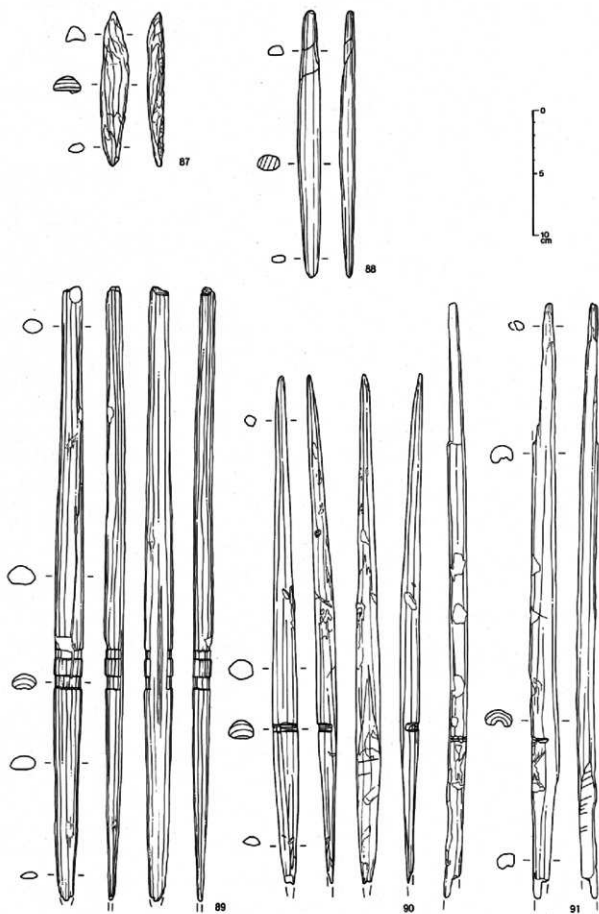
85



86



图IV-31 I B 3 層木製品(23)



图IV-32 I B 3 層木製品(24)

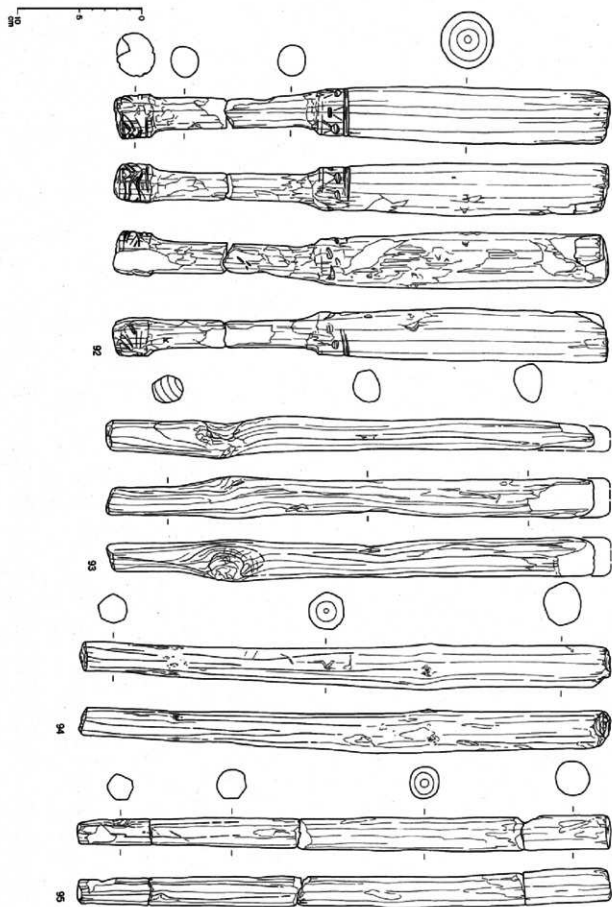
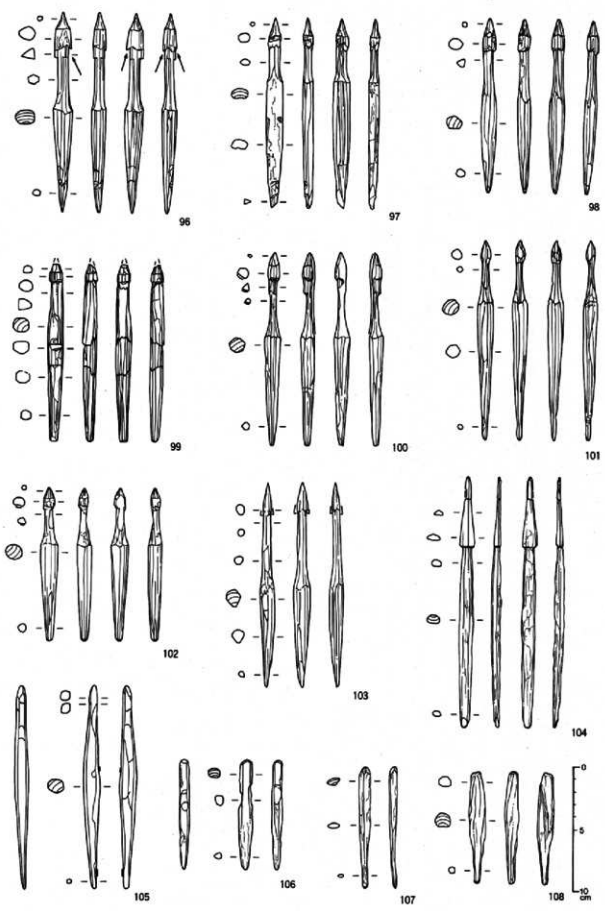
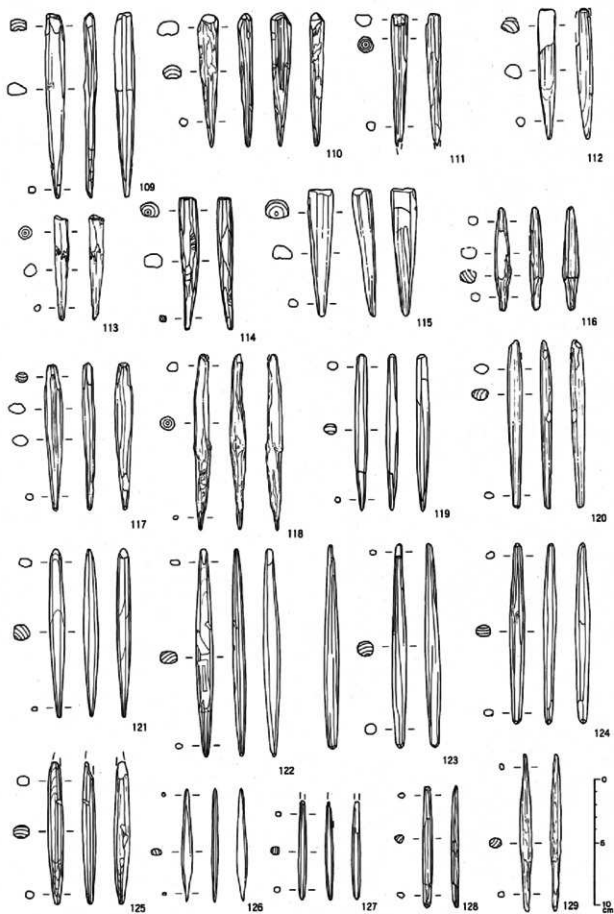


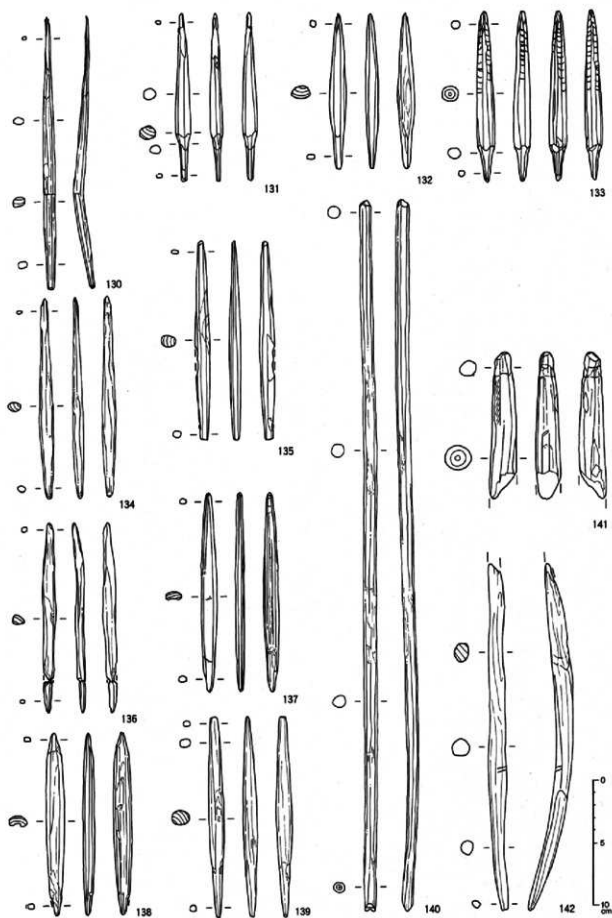
圖 IV-33 I B 3 層木製品 (25)



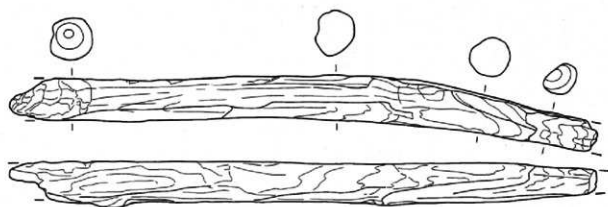
图IV-34 IB3層木製品(26)



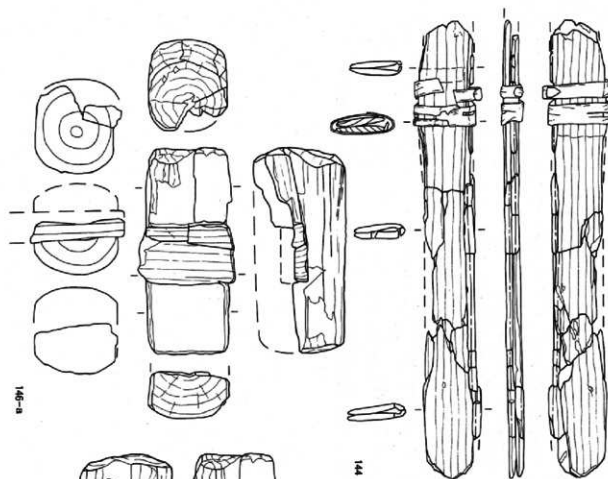
図IV-35 I B 3 層木製品(27)



图IV-36 I B 3 層木製品(28)



143

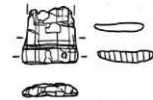
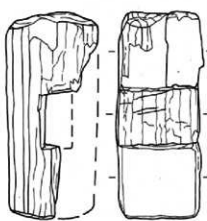


144

146-a

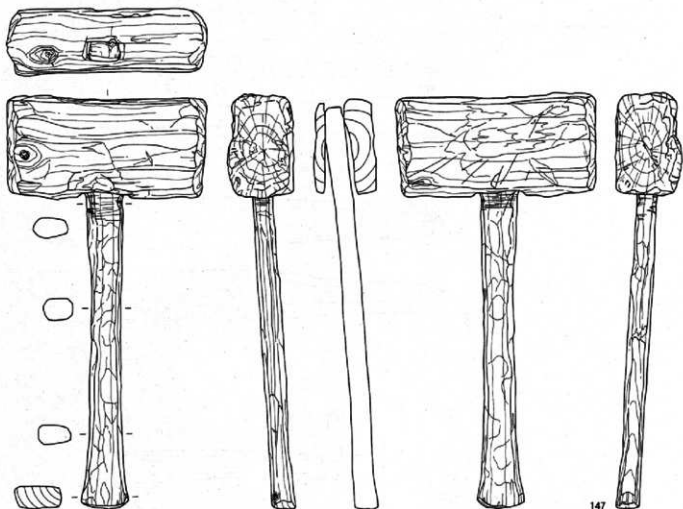


146-b

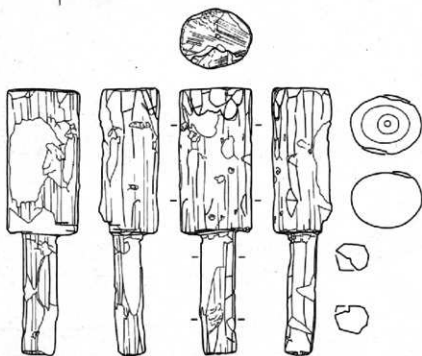


145

图IV-37 I B 3層木製品(29)



147



148

图IV-38 I B 3 層木製品(30)

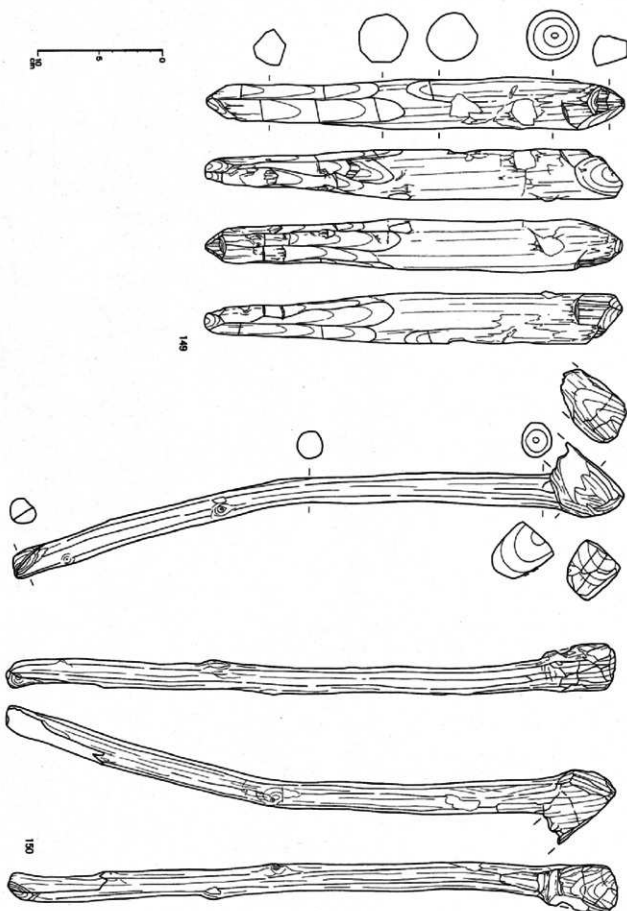
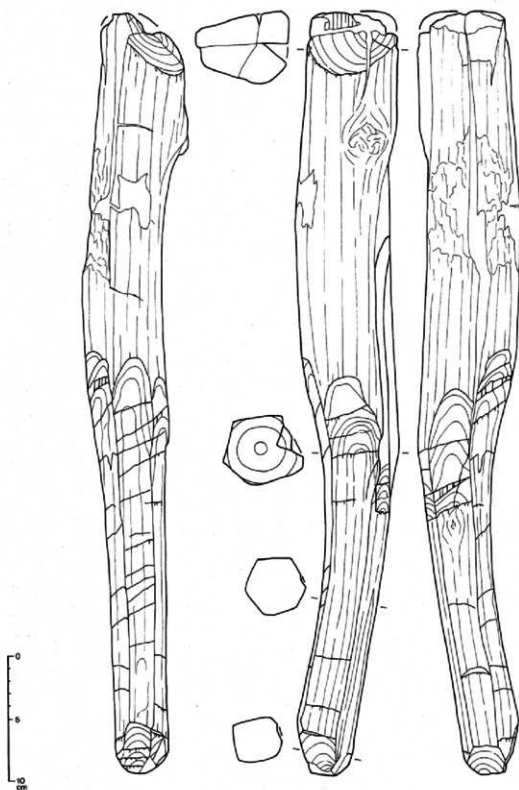


圖 IV-39 I B 3 層木製品 (31)



图IV-40 IB 3 層木製品(32)

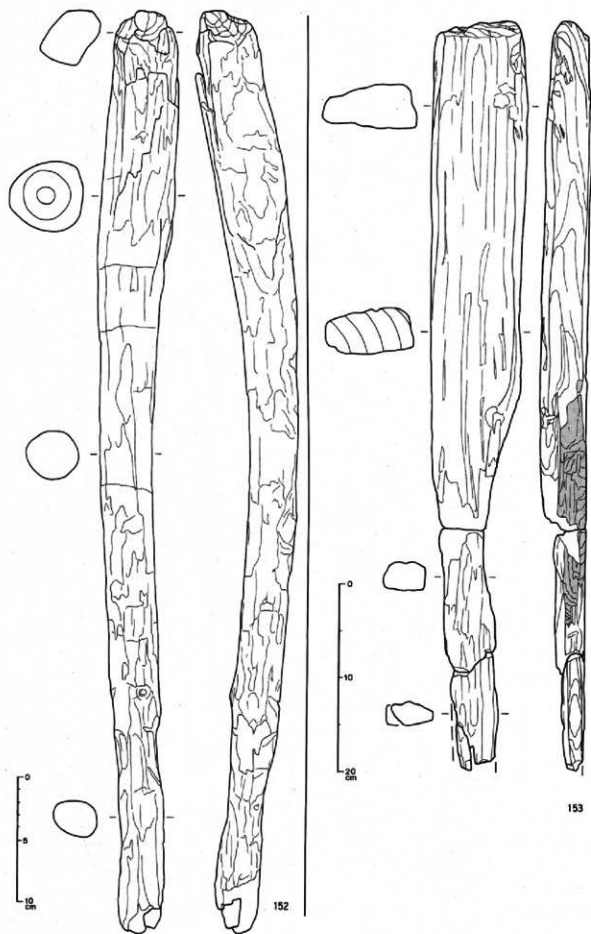
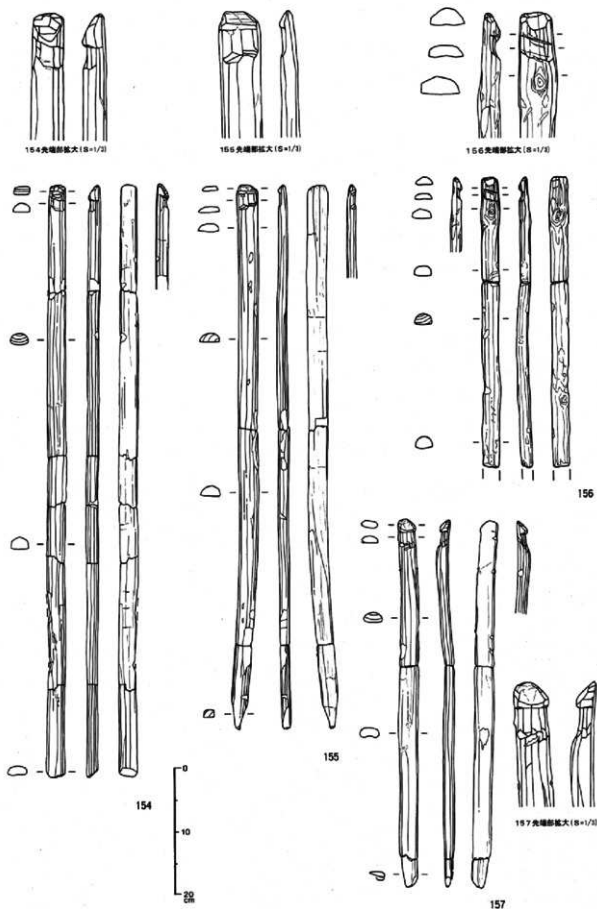
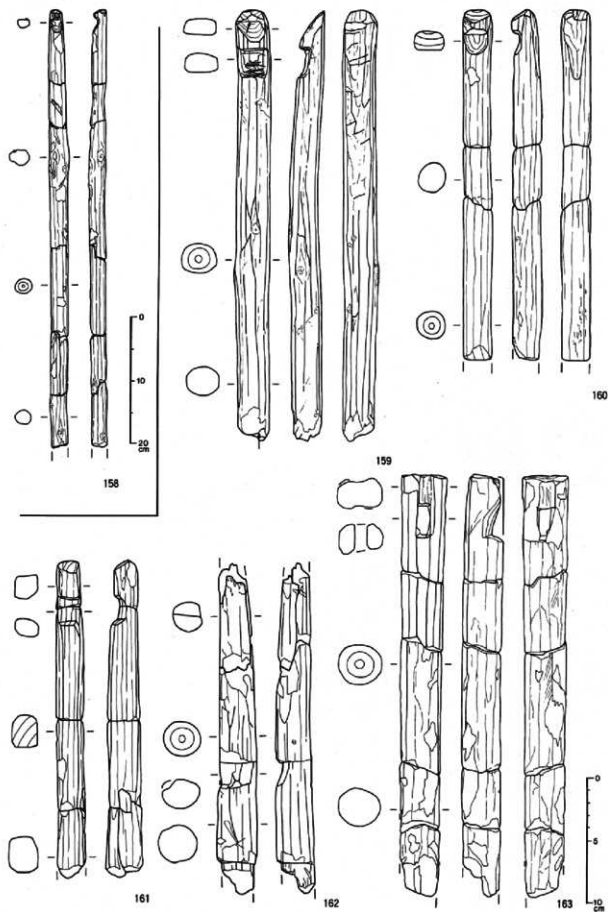


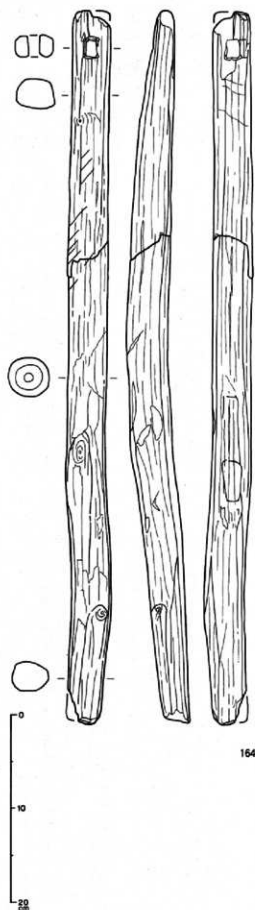
圖 IV-41 I B 3 層木製品 (33)



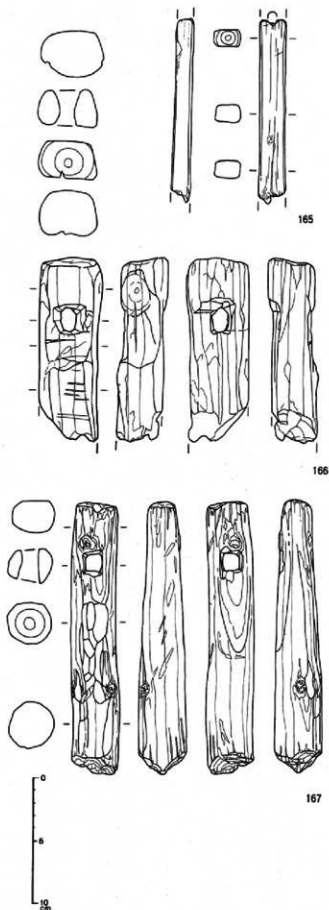
図IV-42 I B 3 層木製品 (34)



图IV-43 I B 3 層木製品 (35)



164

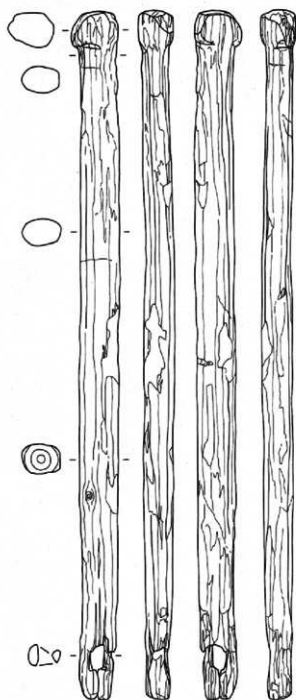


165

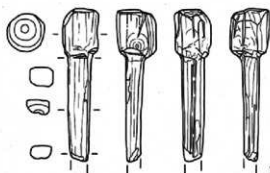
166

167

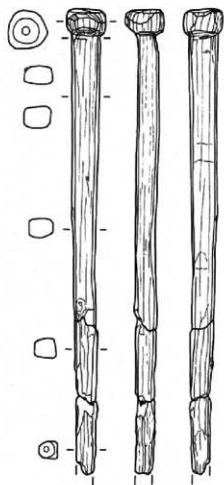
图N-44 I B 3 層木製品(36)



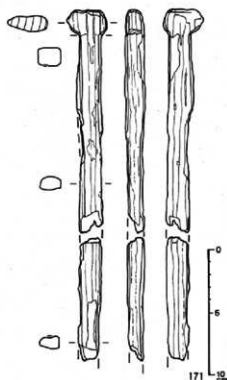
168



170

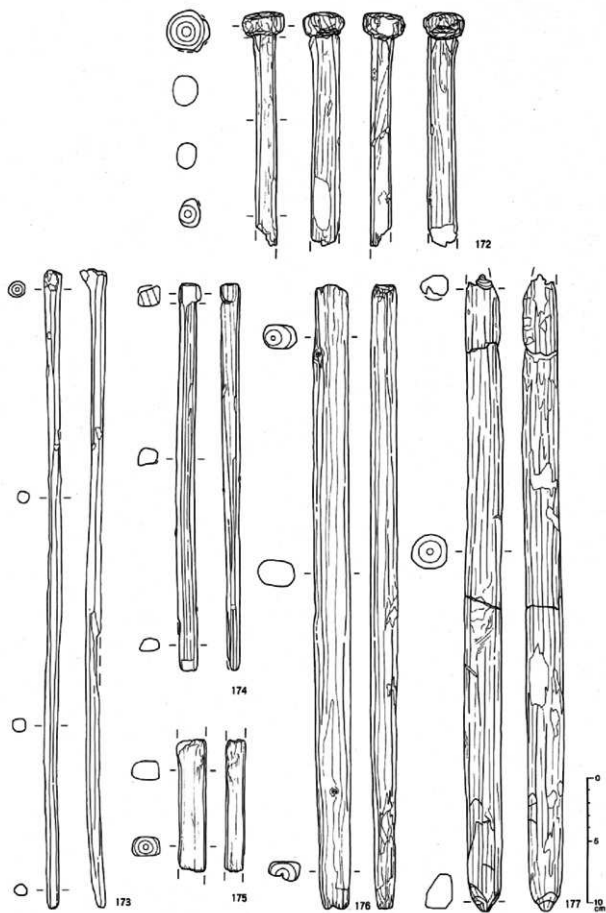


169



171

图IV-45 I B 3 層木製品(37)



圖Ⅳ-46 I B 3層木製品(38)

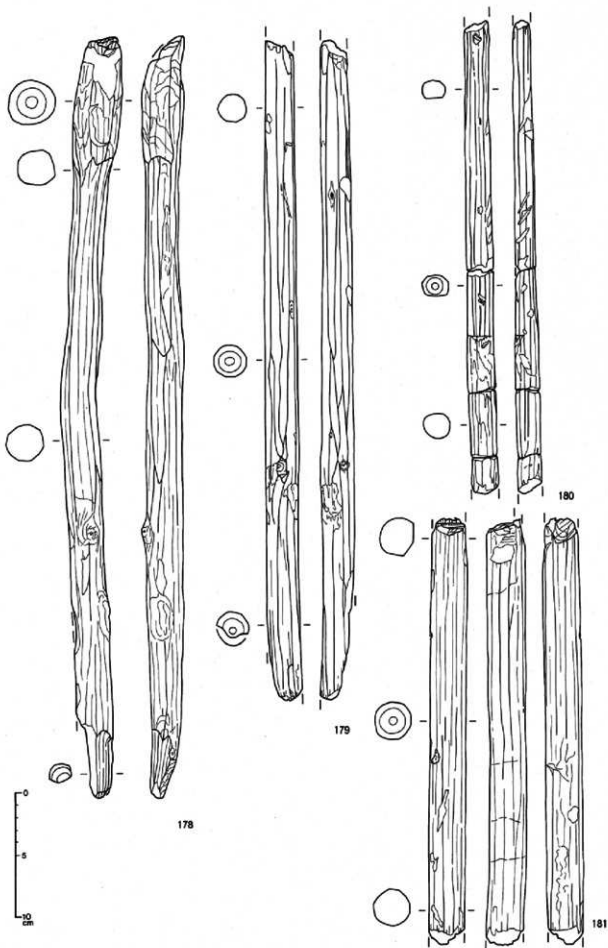
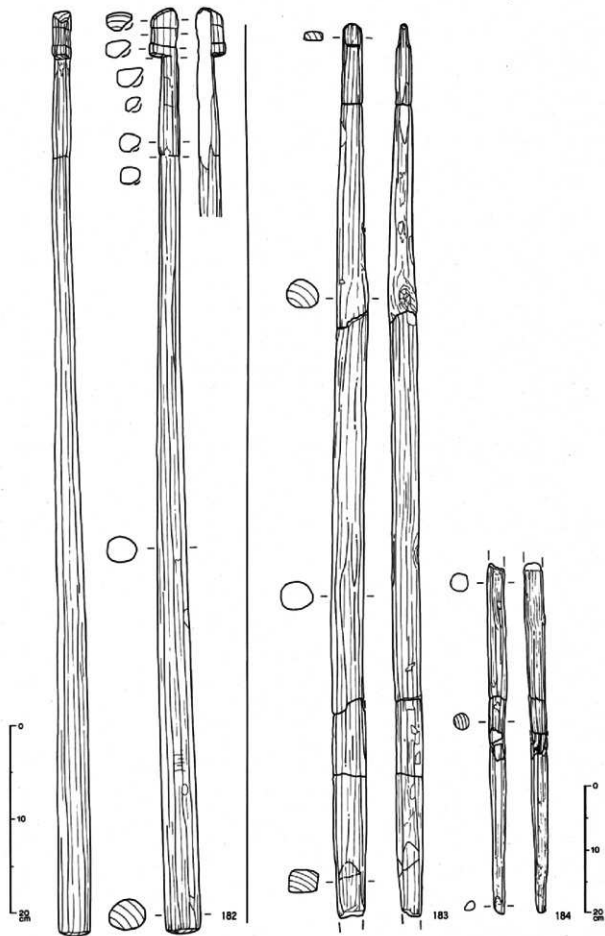
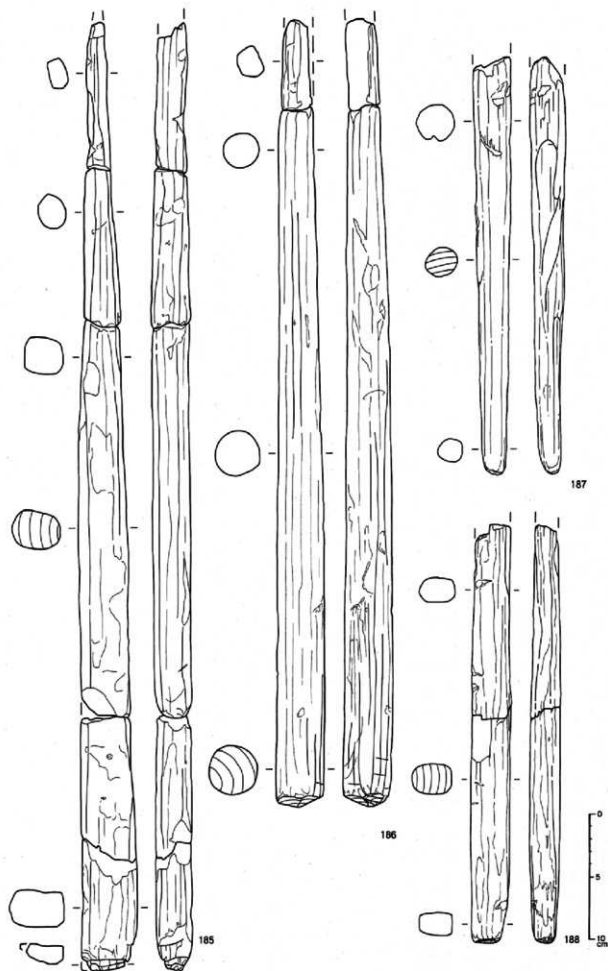


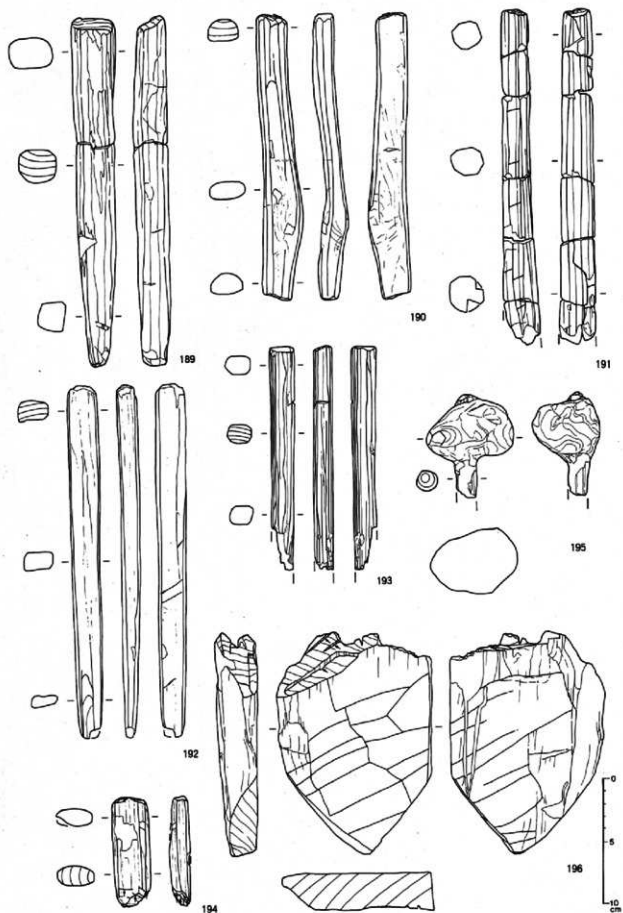
图 IV-47 I B 3 層木製品 (39)



图IV-48 I B 3 層木製品 (40)



图IV-49 I B 3 層木製品(41)



图IV-50 I B 3 層木製品(42)